HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ジル・カンパニョーロ「カール・メンガーにとってオーストリア学派は経済学の「心理学」派だったのか?」：邦訳と解説
Author(s)	松山, 直樹
Citation	經濟學研究, 62(3), 177-206
Issue Date	2013-02-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52294
Type	bulletin (article)
File Information	ES_62(3)_177.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 *62-3*
北海道大学 2013.2

＜翻　訳＞

カール・メンガーにとってオーストリア学派は経済学の「心理学」派だったのか？

――邦訳と解説――*

ジル・カンパニョーロ**
松山　直樹 訳***

Abstract

This is a Japanese translation of ‘Was the Austrian School a “Psychological” School in the realm of Economics in Carl Menger’s view?’ was published by Gilles Campagnolo in the volume he edited: *Carl Menger: Neu erörtert unter Einbeziehung nachgelassener Texte / Discussed on the Basis of New Findings* (Frankfurt/Main: Peter Lang, 2008). Campagnolo elucidates how Menger argued that modern economists should strictly separate economic notions from psychology. Menger recognized the heuristic value of psychology, but rejected any interference in economics, and negated the claim that psychology could serve as the ground for economic theory. Therefore, Menger stressed how confusion that existed at the time between various academic fields, like in the case of the German Historical School, only caused misunderstanding. Max Weber also insisted such a ‘*strenge Trennung*’ (rigorous divide) and F. A. Hayek appropriated Menger’s warning as well. Campagnolo’s paper also shows scientific economics, seen adequately, can bear realism while being solely anchored in an economic understanding of human behavior.

はじめに

ここに訳出したのは，*Carl Menger: Neu erörtert unter Einbeziehung nachgelassener Texte / Discussed on the Basis of New Findings* [1] 所収のフランス人研究者ジル・カンパニョーロ博士(Dr. Gilles Campagnolo)[2]の論文‘Was the Austrian School a “Psychological” School in the realm of Economics in Carl Menger’s view?’である。このカンパニョーロ論文は，2005年に開催された「ヨーロッパ経済思想史学会(European

* 本稿は，訳者が北海道大学大学院経済学研究科に在職中，原著者が同研究科の社会経済歴史分析講座が主催する「社会経済学研究会」(2011年12月22日)で報告したことに端を発している。このような機会を与えてくださった，同講座に所属する各教員(岡部洋實教授，佐々木憲介教授，西部忠教授，橋本努教授)と研究会参加者，ならびに，原著者の在外研究の受け入れを許可された村松正隆准教授(北海道大学大学院文学研究科)に感謝致します。また，尾近裕幸教授(國學院大學経済学部)から多くの助言をいただきました。改めて感謝申し上げます。

** Directeur de recherches, Centre national de la recherche scientifique (CNRS), Aix-Marseilles School of Economics. E-mail: Gilles.Campagnolo@univ-amu.fr

*** 兵庫県立大学経済学部 講師 E-mail: naoki.ma@econ.u-hyogo.ac.jp

Society for the History of Economic Thought)」にて原著者が報告した研究論文が基礎になっている。それはのちに，いくつかの修正が施され，上記の *Carl Menger* に収録された。

近年，新古典派経済学の均衡論的な分析アプローチとは異なるかたちで，進化経済学，行動経済学，実験経済学，神経経済学といった新たな領域では，必ずしも自己利益の最大化のみを目的にしない，実際の人間行動を考察の対象に位置づけている。特に，行動経済学では，社会心理学の研究成果が積極的に評価されており，心理学的知見に注目する傾向が見られる。しかしながら，そのような潮流は決して新しいものではない。とりわけ限界革命期(19 世紀後半)における経済学者たちは，経済学の科学化を目指して人間本性の道徳的・倫理的側面と経済主体の行動との関係に関する議論に熱心であった[3]。かくして近年の経済学の動向は，現代経済学形成期への回顧を付随的にも推し進めており，経済学がどの程度の現実的あるいは実践的な意義を含む学問であるかに関する学問的内省を促している。カンパニョーロ論文は，限界革命の担い手のひとりとして理解されているカール・メンガー(Carl Menger, 1840-1921)による心理学の扱いを検討したものであり，メンガーが社会科学における形而上学の展開者のひとりでもあったことを明らかにした点に独自性がある[4]。メンガー経済学に特徴的な主観主義の本質を理解するうえで，カンパニョーロ論文は非常に有益であると考えられることから，ここに邦訳を発表する。

尚，原著者による注はすべてページ下部に脚注として付し，訳者による注は文末にまとめた。もちろん，訳稿全体に関する責任のすべては訳者に帰するものである。

凡例として，以下の点を記しておきたい。

1　原文のイタリック体は，訳文ではゴチック体で示した。その必要がないと思われるラテン語慣用句などは通常の字体で示した。
2　原語を示す必要があると思われた場合には，訳語に続く(　)でそれを併記した。
3　訳文のなかの(　)記号は，上述２の例外もあるが，原著者のものである。
4　原文において文献名以外の“　”は，「　」で示した。
5　外国語文献の書名は，邦訳がある場合にはそれを尊重し，初出に限り原題を併記した。
6　訳文のなかの[　]記号は，訳者の補足である。
7　原著者の注([1], [2], [3])と区別するため，訳者の注([1], [2], [3])には番号に[　]を付し，論文本文の末尾にまとめた。
8　原著者の了解のもと，原文における誤字脱字等の修正を加えたうえで訳出した箇所がいくつかある。

本文

1900 年代，経済学において「心理学派(Psychological School)」という呼称が頻繁に用いられた。それは，新興の限界学派を指し示すために，とりわけドイツ語圏において使用されたのであり，例えばオスカー・クラウスの著書(特に Kraus 1905)に見られるように，「歴史学派」に対峙させるために用いられた。その呼称はまた，それまで支配的であった古典派的パラダイムからの脱却を意図していた。そのために，限界主義者たちは，**プシュケー**(*psyche*)[5]という概念のような，いくぶん古臭くなった構想に向かったのである。こうした状況を背景にして，メンガーは，『ニコマコス倫理学(*Nicomachean Ethics*)』や『霊魂論(*De Anima*)』といったアリストテレス(Aristoteles, 384 B.C.-322 B.C.)の著作を直接参照した。それ以降，クラウスのような評者たちは，メンガーの教え子たち(ベーム＝バヴェルク，ヴィーザーなど)のような他の

「オーストリアの」限界経済学者たちによる研究に対して「**心理学派**(*psychologische Schule*)」という呼称を用い，最終的には，新たな学派全体に対しても，その呼称を拡げたために，それは「心理学派」として一括されることになった。

それでは，実際にメンガーはどの程度，自らの経済学理論を心理学に基礎づけていたのだろうか？　「*Grenznutzlehre*(限界効用理論)」が提示されるや否や，マックス・ヴェーバー（Max Weber, 1864-1920，特に Weber 1908, p.384)は，その理論の支持者として(そして，まさにヴェーバー自身が明言しているように，メンガーの著作を含む同時代の純粋経済学に多くの注意を向けた読者としても)，「限界効用理論」を心理学にもとづいて理解することに反対すべきであると感じた。経済理論を「心理学によって」基礎づけなければならないという考え方，とりわけクラウスが主張したようなやり方で心理学的基礎づけをおこなわねばならないという考え方は，ヴェーバーによれば，ルーヨ・ブレンターノ(Lujo Brentano, 1844-1931)やカオラ(Rudolf Kaulla, 1872-1954)など，当時のドイツ語圏の学問世界(*Academia*)を代表する人々にも支持されていた。しかし，ヴェーバーには，そうした考えが完全に誤りであるように思われた。

「**限界効用理論**」を展開した幾人かの研究者の見解は，いわゆる「**精神物理学の基本法則**(*psychophysisches Grundgesetz*)」(ヴェーバー＝フェヒナー法則としても知られており，発案者のひとりはマックス・ヴェーバーと同じ姓であった)にもとづいていたようであった。彼らは，限界主義経済学の新しい説明方法に対する弁明を精神物理学の基本法則に見出し，それを限界主義的推論の根拠になりうるものとして理解していた。こうした考えは，当初から意識的に主張されたわけではなかったものの，精神物理学の基本法則が限界効用理論の根拠になりうると気づかれはじめ，同時にそれは(限界効用理論という)新たな教義体系を基礎づける便利な手段とみなされるようになったのである。カール・メンガー，そして同じ立場からマックス・ヴェーバーが，こうした限界効用理論の「心理学的基礎」を検討し，それを戒めたのであるが，それは，後のオーストリア学派の継承者たちにも当てはまる。本稿では，この問題を検討していく。以下では，最初に原典を確認し，科学の体系や分類に関して，それらの文献がどのような立場をとっていたのかを包括的にみることにしよう。

1. オーストリア学派の創設者と心理学研究

まずわれわれは，メンガーの思想において何が経済学と心理学とを結びつけていたのか，そして，それぞれの分野にとって独自であったものの，ほとんどの場合において，明確に経済学と心理学の間で共有されていた概念が，いかにして 1900 年前後の経済学研究と心理学研究の内部に混乱(confusion)をもたらす原因になったのかを明らかにする。実際には，経済学と心理学は，各々の分野に関するよりよい理解のために区別されなければならなかったのである―ヴェーバーは後にそのことを「**ある種の厳密な分離**(*eine strenge Trennung*)」と指摘した[1)]。

当時，メンガーは心理学に関してどのような書籍を読んだのだろうか？　日米両国にある彼の文庫やアーカイブズ[6]から，メンガーが以下のような書籍を読んでいたことがわかる。すなわち，1879 年にウィーンにて Wilhelm

1) このことは，半世紀以上にわたって心理学的洞察を排除してきた 20 世紀の経済学にとって最も重要である。純粋経済学の「着想の源泉」として「心理学への回帰」は，われわれの記憶にあるようなフレイとベンツ(2004, p.68)のように，最近になって―最近 10 年のうちに―再び開始されたものである。経済学研究の世界と心理学の世界の両者は，1930 年代に方法を分けた。それは，「効用概念の革命的変化」に起因する徹底的な「経済学における心理学の喪失」であり，ライオネル・ロビンズが**基数的に**測定される効用関数の本質的存在やそれを直接的に価値判断することの可能性に疑問を呈したときに生じた。

Braumüller 社(メンガーの『経済学原理』[以下,『原理』と表記]と同じ出版社)から出版された,ストリッカー(Salomon Stricker, 1834-1898)の『意識に関する研究(*Studien über das Bewusstsein*)』,1876 年に Schloss-Chemnitz 社から出版されたワイドマン(Paul Widemann, 1851-1928)の『思考の形態と法則の起源に関する研究(*Eine Untersuchung des Ursprungs den Formen und Gesetze des Denkens*)』,それに,もちろんヴィルヘルム・ヴント(Wilhelm Max Wundt, 1832-1920)のいくつかの講義やテキスト,さらにメンガーはそれほど有名ではない文献にも目を通していた。

実際のところ,メンガーがその主題について書き記したことだけで判断するなら,彼は 1883 年の『社会科学,特に経済学の方法に関する研究』[以下,『経済学の方法』と表記]においてでさえ,直接的に心理学の問題について多くのことを書いてはいない。せいぜい晩年に彼が書いたノートや,メンガー文庫(メンガーのアーカイブズは,一橋大学とデューク大学の二つの研究施設に保管されている)の書籍に残っている彼自身による注釈に,いくつかのヒントを見出すことができるだけである。デューク大学のパーキンス・ライブラリーに所蔵されている晩年のノートには,ヴントに関する批判的なメモ書きが残されており,興味深い[2)]。ただし全体的には,メンガーの心理学に対する関心は明らかであり,研究者人生の終わりがけに膨らんだようであるものの,まるで新たな「基礎的な領域」が心理学にあるかのごとく,同様にそのような基礎的領域が,初期の経済学や古典派経済学の,とりわけ功利主義の思想のなかに,さらにメンガーが偶然に知り,批判を加えたゴッセンの思想のような他の有望な洞察に含まれているかのように,自らの経済学派に対する呼称にある疑念を残した。本稿の検討をこの点から,つまり,快楽主義的で功利主義的な主体,あるいは,いずれか一方の主体という点から始めるのが望ましいであろう。

さて,人間行為を対象とする経済学へのメンガーのアプローチには,明らかに心理学的洞察に訴えるという面と,それを排除しようとしている面の両者があると考えられるだろう。経済主体が自らの「選好」を並べる序列を説明しているメンガーの有名な三角形に見出しうることは,数値を用いて書かれているとはいえ(『原理』p.93),[その選好が]出発点においてすでに序数的なものであったということである[3)]。メンガーの時代の心理学は,科学的正当性を獲得するために,内観(introspection)から離れることに懸命になっていたのであり,ますます実験的なアプローチ―ヴントの研究が有名であった―を採用するようになった。他方,定量的な実験を行う傾向があるなかで,経済学者たちは,単に歴史的なアプローチに沿った研究のために,科学から遠のいてしまったことに気づき始めた。メンガーは,[歴史的アプローチに代わる]新たな方法を生み出すことを奨励していたが,自らの考えをそのような新しいアプローチとして考えることができた。すなわち,新しいアプローチにおいては,ただ顕示選好の序数的な並びがすべてであったのである。そうした選好の序数的な並びだけで,人間行動が説明できるほど強力なものであったため,もはや経済学者は誰も半世紀以上にわたって主体の「内面(inner side)」あるいは「内なる自分(inner self)」について考察されてきた心理学的洞察を必要としな

2) デューク大学のパーキンス図書館におけるアーカイブズ・ワークにもとづいて,本稿のトピックを進めている。この点に関するボックスの参照番号は,1910 年代の欠落があるノートブックの 1-3 ならびに 14-20 である。例えば,ヴント批判の資料がある。それらはまた,『経済学の方法』の修正箇所を明らかにしているが,それにも関わらずそれを扱った研究はほとんどない。これらは,メンガーがそのような研究の将来を過小評価して考慮していたことを認めるものである。

3) メンガー表の三角形の形態については,文末の付録を参照されたい。

くなったのだろう。こうした展開は，「心理学派」という名称とは明らかに矛盾するものであった。これら二つの相反する見解に(評者や追随者は)どのように折り合いを付けたのだろうか？　より正確に言うならば，それらの矛盾する見解は，オーストリア学派経済学，つまりメンガーの経済学のなかで定着したものになっているのだろうか？

確かに19世紀末の経済学は，20世紀における発展のほとんどを予見することができなかったし，そうした発展の基本原理と心理学との関係についてさえ，はっきりとしていたわけではない。例えば，ゲーム理論と心理学の関係はどうだろうか？　その理論の限界とは何なのか？　こう考えると，メンガーによる先人的な洞察を，純粋経済学に対する心理学的な基礎と解釈すべきか，それともむしろ，経済学と心理学における厳密な区別の要求と解釈すべきかが，一見すると不明瞭であるとしても当然といえよう。以下では，この点[どちらの解釈が正しいのか]を明らかにし，ある特定の領域で経済学を基礎づけるために，メンガーがどのくらい心理学を用いたのか(あるいは用いなかったか)を検討していこう。

メンガーが主張した研究の性質や方法を検討する場合，最初に，当時一般的に受け入れられていた効用，すなわち，広い意味での幸福(happiness)の基礎という問題から出発し，続いて，メンガー自身がその効用をどのように基礎づけたのか，つまり，アリストテレス的な基礎づけか，功利主義的なそれか，それとも他の別のものかについて，そして，限界主義において主観的な幸福状態(well-being)がもつ意味について考えていくことになる。幸福は，当時の経済分析の基本的な特徴であったが，その後，20世紀の主流派経済学によって数学的に定式化されたモデルからは消え去った。メンガーは，ベンサム＝ジェヴォンズ的伝統や快楽主義的議論に対して，どのような態度を取っていたのだろうか。ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセン(Hermann Heinrich Gossen, 1810-1858)は，1854年に心理学的な指向を有する研究に取り組んでおり，快楽主義的な議論を提起した人物である。彼は，厳密ではないものの限界効用の考え方について定義しており，この点は後にワルラスが評価している。以下では，メンガーがゴッセンの著作を読んだことを示すアーカイブズを利用して，メンガーが所持していたゴッセンの著作に関するメモ書きを考察していく。このようにして，付随的にもメンガーの剽窃に関するパンタレオーニの告発が誤りであったことが判明するだろう。本稿ではまた，メンガーによる**プシュケー**のアリストテレス的概念の扱い方を検討するため，その場合においてもアーカイブズに依拠して議論を進めていくつもりである。

第二に，本稿では，一般的な水準における限界主義者の主題(**限界効用理論**)について，ヴェーバーが提起した問いに注目し，その背後に，どのようなかたちで「精神物理学の法則」が見出されるのか(あるいは，見出されないのか)に焦点を当ていこう。他方で，本稿ではまた，メンガーの後継者たち(オーストリア学派)についても言及し，彼らが心理学的な法則の役割をどのように理解していたのかについても考察する。彼らは，経済学と心理学の双方の領域の研究者に求められた研究上の分担に関するメンガーの提案に対して，正確に解釈をしていたのだろうか？　そして，彼らが正確に解釈していたならば，基本特性として理解される経済主体や人間の行為に関して，どのような解釈がなされていたのだろうか？　この論点については，まず，あらゆる心理学的基礎に対して批判的な立場にあったマックス・ヴェーバーについて議論する。それから，ミーゼス(Ludwig von Mises, 1881-1973)やハイエク(Friedrich August von Hayek, 1899-1992)の研究(『ヒューマン・アクション』や『感覚秩序』)における心理学的な基礎をめぐって，「オーストリア的な特徴(Austrianness)」に関する二者の見解につい

て示唆を与え，オーストリア学派が経済学の領域における「心理学」派であるのかどうかについて評価を試みていく。限界主義者たちは，「新たに」「純粋な」経済学を作り上げたのだが，オーストリア学派(の人々)には，とりわけそのような傾向が見られる。彼らのパラダイムは，心理学的な立場にもとづくものであったのだろうか，あるいは，そうではなかったのか？　メンガーの視座は，[後継者たちの視座と]異なっていたのだろうか？

2. 幸福と主観性：ゴッセンやアリストテレスの著作に対するメンガーの分析

2.1. 心理学的な出発点としての経済学における幸福

経済学を科学として構築するために，経済学者たちが経済主体にいくつかの性質を仮定して以来，「**ホモ・エコノミカス**(*Homo economicus*)」という呼称は，経済主体のある共通する性質を指し示すために使用されてきた。そのような性質から導出されたのは，ある(予算や他のありうべき)制約下における経済主体の行為によって，どのように交換が成立し，価格が形成されるのかを理解するための方法であった。そういった仮想的な「ホモ・エコノミカス」は，通常の人間とは大いに異なっており，パラダイム如何で変質してしまうであろう。つまり，古典派経済学，新古典派経済学，あるいは現在検討している限界主義のいずれのパラダイムも，経済主体の心理学的な枠組みに経済学者たちが与えている前提に影響を及ぼしてしまうのである。ライオネル・ロビンズ(Lionel Robbins, 1898-1984)が1930年代に提唱した考え方にしたがって，経済学者たちが経済主体の意識の内部で何が生じたのかについて言及するのを避ける場合でさえ，そして，経済学者たちが観察可能な行為(external behaviour)によって明らかにする場合に限ってのみ，選好は固定的に扱われた。そのため，心理学を視野の外に完全に捨て去ってしまうような場合でさえ，経済学者たちは主体に想定された行為に関して，何らかの心理学的な影響に必ず対峙してしまうのである。

経済学者たちが意図して心理学的な影響について述べていようがいまいが，あるいは反対に，それらについて積極的に説明していようがいまいが，問題は分析方法の選択に関わるものであって，心理学的な影響から無関係なものとして「心(mind)」を定義することは，経済科学のやるべきことではない。それとは対照的に，むしろ経済学が「人間本性」を理解する試みから始まったという点を強調すべきであろう(すなわち，ヒュームの『人間本性論』や，18世紀の感覚主義から『国富論』の議論の下地を成している『道徳感情論』に至るまでの示唆のなかに，本稿の主題に関わる基礎的な研究が見出される)。19世紀には，古典派経済学とその対抗学派であるドイツ歴史学派の双方の領域では，そのような心理学的な洞察が日常的に扱われていたのであるが(そのこと自体はときどき否定されたが)，それとは対照的に，厳密に個人は過小評価されてきたため，全体(共同体や階級)として[その内部に含まれる]人びとが移り変わっていく歴史的事実に比べると考慮されることが少なかった。これまで個人の幸福は，大きな関心を集めるトピックとして考えられてこなかったのである。

もちろん，そのような個人の私的な幸福(personal happiness)にもとづくひと続きの伝統が存在しており，その伝統とは，「幸福の計算(felicific calculus)」を扱うベンサム(Jeremy Bentham, 1748-1832)の功利主義である。それはまさに，快楽と苦痛に関する客観的な判断を根拠にするものであって，その時代の大部分を占めていた根本的なブルジョア的価値観のようなものであった。つまり，個々の主体における幸福状態(well-being)というものは，合理的で栄養のよく行き届いていたヴィクトリア朝のイギリス人(Briton)が期待していたことと，それ

ほどかけ離れたものではなかったのである。もっとも，その計算は個人的に行われるものである(窃盗をすることによって数年間だけ刑務所に収容される可能性に価値を見出すかどうかを算定するような泥棒が想定されている)。社会を構成する任意の「私」は，経済的行為を含めて，彼／彼女が自らの行為からどの程度の快楽がもたらされるのかを算出し，そのような行為の後にもたらされる苦痛が彼／彼女にとってどの程度のものであるのかをおそらく瞬時に理解するのである。功利主義の基準は，そのようにして究極的には個人でなく社会全体の最大幸福を保証する傾向をもっている。そこには，「見えざる手」に導かれ，地球規模での公共財を含めた考え抜かれた私的利益を調和させるスキームが，まるで存在しているかのようである。逆説的ではあるが，ある社会全体の調和を考える際に，諸個人は，そのような功利主義においては二次的な関心であるにすぎない。功利主義は，私的な快楽主義を一般的な幸福状態を保証するものとみなしているのである。そういう意味では，個々人に関する心理学の特徴というものは，経済的というよりもむしろ政治的に広い目的についてより多くのことを導き出すものなのである。

さて，メンガーには，経済理論の役割がそのような功利主義の展開にあるようには見えなかった。それゆえ，ここでは幸福の研究に関する主題を扱っていくことなる。メンガーは，個人的な必要やそれらの満足を実際に考慮するために，そのような幸福の研究が重要であると考えていた。メンガーは，古典派の伝統を学ぶとともに，推論の「限界的」方法を最初に展開したドイツ人経済学者ヘルマン・ゴッセンの著作も研究していた。しかしながら，単なる経済学者ではなくひとりの思索家として，メンガーがアリストテレスに関心を寄せていたことは，彼の「**プシュケー**の幸福状態(well-being of the *psyche*)」に関する観念が，アリストテレスにもとづいており，それが確実に厳密な主観主義的アプローチに結びつけられていることからも明らかである。したがって，この点は，推論の方法をめぐり，メンガーの見解が，イギリスの限界主義者たちによる功利主義と実際に衝突することになった明確な理由である。イギリスに功利主義の役割を紹介したのはベンサムであり，ジェヴォンズもまた功利主義を主張しており，限界主義的方法に向けて経済思想を実質的に変更させた人物である[4)]。古典派経済学者や歴史主義者の両者に対抗して，メンガーは，必要の主観的満足に幸福を基礎づけたことから，彼の試みは多くの論者に「心理学的」と分類されたが，実際には，功利主義者や快楽主義者でも，ベンサム主義者やゴッセン主義者でもなかったのである。

2.2. ゴッセンの読者メンガー
――快楽主義に対するメンガーの批判――

ヘルマン・ゴッセンは，以下の点が見出しうることを研究した一人目の著作家である。すなわち，彼は，何人も他人の必要(needs)や，それから生じる満足(あるいは苦痛)を決して知ることはできず，そしてそのことが，快楽は物的な財によって最大化されるという目に見えないルールにしたがっていることを唯一の根拠にして，独立した自己が自らの必要を主観的に評価していると想定したのである。さて，そのことがあらゆる「限界的な」推論方法から独立して，事実に反していないようであるならば，ゴッセンやメンガーの方法を「心理学」の内部で言及する際，その両者の方法の射程についてはよく考えねばならない。

メンガーは，ゴッセンの著作『人間交易論，そこから導き出される人間行為の規則の展開(*Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fließenden Regeln*

4) その後の記述に与えられる結果の証拠を，ここでは詳細に示す事ができない。その点についてはCampagnolo(2010)を参照されたい。

für menschliches Handeln)』を読んでいた。現在，実際にメンガーが読んだというゴッセンの本は，日本のメンガー文庫に保管されている[5]。その本にはメンガー直筆のメモ書きがあり，メンガーがいつも本の最初のページに購入日を書いていたように，彼が読んだ大体の日付が付されている。そこには「1886年5月8日」と記してある。文献学的見地から，イタリア人経済学者マフェオ・パンタレオーニ(Maffeo Pantaleoni, 1857-1924)が1900年代にメンガーの剽窃を告発したため，その本は非常によく知られている[7]。パンタレオーニは，ゴッセンの著作にもとづいて経済学を展開した人物である。メンガーがゴッセンの本を購入する前に読んでいたというのは非常に疑わしいのだけれども，ワルラス(Marie Esprit Léon Walras, 1834-1910)以外にも，よく知られているように，コーツ(Gyula Kautz, 1829-1909)もまたゴッセンに言及していた[6]。もっとも，現在ではパンタレオーニによる告発が誤りであったことを，アーカイブズが証明している。

表紙に書かれた購入日のほかに，メンガーが『原理』(1871年)を執筆後，だいぶ経って所有することになったゴッセンの著作には，メンガーが書き付けた箇所があり，そこには，ゴッセンの見解には賛同しかねるため，おそらく無視することができるだろうという注釈も含まれている。概念的な観点からは，実際のところ，限界主義的な推論に共通する原理を除き，メンガーはゴッセンに対してまったくといっていいほど同意していない。この点は，限界主義を理解していく限り，ジェヴォンズやワルラスについて検討する場合も同様である。ここで注意すべきことがある。ゴッセンらによれば，自らの必要(need)に相応しいと判断する財について，すべての行為主体は，財の追加的な単位を交換する際に，すでにそれを手渡す用意があることを十分理解しているというのである。彼／彼女が満たされた状態に至るまで，それぞれの新たな単位は，メンガーが想定するよりも多くの**満足**(*Sättigung*)を提供するわけではない。ゴッセンが述べているのは，彼の推論方法を可能にした二つの「**快楽の法則**(*Gesetze der Genießen*)」というものである。

二つの「快楽の法則」のうち，1895年にレキシス(Wilhelm Lexis, 1837-1914)[8]が「第一法則」と呼んだものは，「究極的に満足する状態に達するまで干渉されることなく快楽を満たし続ける場合，快楽の程度は連続的に減少する」[7]というものである。この法則は，快楽を満たしていくために，ある財の新たな単位が(「限界」において)効用を減少させることを示している。ゴッセンは，以下のような三角形のグラフ(ここでは単純化している)を用いることで，この法則を幾何学的に表現したのである。

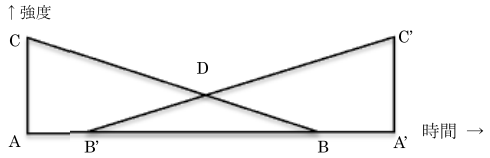
第二法則は，個別の主体による異なる二つ(あるいはそれ以上)の行動が，「限界において」もたらす快楽を均等化するというものである。(任意に単純化したやり方では)以下のように，幾

5) 一橋大学にメンガー文庫が移譲された経緯については，Campagnolo(2000)を参照されたい。

6) ゴッセンの文献は1854年に出版されている。ワルラスは1885年の論文「知られざる経済学者(Un économiste inconnu)」(*Journal des économistes* 所収)において，理論経済学と経済思想史の双方においてゴッセンを再び紹介した。メンガーは，自ら所持していたゴッセンの本に注釈を付したけれども，詳細についてはまったく述べておらず，オーストリアの大学で用いられた『科学としての経済学』というテキストを出版したコーツは，限界的な推論におけるいくつかの手がかりにうんざりしていた。Kautz(1858, p.9)ならびにreed版のp.704を参照されたい。

7) Gossen (1854, p,4)ならびに英語版のp.6を参照されたい。

何学的図形を描くことができる。



横軸は時間であり，三角形 ABC と三角形 A' B' C' は正反対を表している。二つの三角形が交わる部分は，一方の主体側における二つの財／行動の間の中立的な部分である。三つ以上の財／行動の場合には，これらはグラフ上に描くことはできない。ゴッセンは数理分析を用いたが，メンガーはいくつかの本質的な理由からそれを拒否した。

メンガーがゴッセンの著作に書き付けた注釈には，ある財が最終的に満足をもたらす単位を別の財との関係で評価しようとする点ではゴッセンの推論に同意できる，ということが明確に記されている。この点は，後に「限界主義」の基本事項となり，受け入れられていく。だからといって，ゴッセンの「快楽法則」に基礎づけられたそのような考えをメンガーが受け入れたことを意味するわけではない。メンガーの注釈を読めば，この点は明らかになるのであって，まったくもって消極的に評価しているのである。ゴッセンの分析は，利己的な主体を心理学の観点から表現したものである。そのような利己的な主体は，実際に（かつ，ゴッセンによれば合法的に）快楽にしか関心を抱かない。そのことは必要の充足と同じではないため，メンガーは，このようなゴッセンの要点を受け入れることができなかった。メンガーは，ゴッセンの強度と時間に関する推論（最終的には，古い伝統のなかにも見出された）については賛同しているが，理論上の基礎として扱われた自己中心的な快楽主義的心理学を強く非難した。結局のところ，ゴッセンの心理学が意味していたものは，純粋経済学的な推論の代わりに，経済学は実験心理学によって発見されるような事実に基礎を置かねばならないということであった。ゴッセンの考えには，今では「最大化計算」と呼ばれるようになったものだけでなく，「人間は，自らの快楽（Genießen）の合計を可能なかぎり最も高い状態にするように行動しなければならない」という，快楽（Genießen）の追求も含まれている。

メンガーは，そのような見解を拒否しており，必要を充足する際の一時的な導関数の計算とみなした。そのような必要の充足は，快楽によって導かれる方法にもとづく場合には道義に反しており，数学や適切でない概念から得られる場合には不適当であるとした。限界単位の配列は，人間本性に関する道徳的見地ではなく（先の場合は意識的に不道徳的なものであったが），論理的なツールとして考慮されねばならなかった。物的快楽に関する哲学は，純粋経済学の基礎になりうるものではないし，観念論哲学にもなりえない。すなわち，メンガーが『原理』の冒頭で「あらゆる物は因果の法則に支配されている」（『原理』，p.1）と述べているように，知識に関する因果律理論のみが，経済学にふさわしいのである。ゴッセンが，これらのことを適切に考慮することはなかった。逆に，ゴッセンの見解において絶対的なものは，すべての人びとは厳密に物的満足にのみしたがっている，という事実であった。メンガーはこの点を，新たな創造（a renewed Creation）を通じて人類は救済される[8]という彼の主張と同じく誤ったものであると判断していた。最後に，重要なことを指摘していなかったが，上述の議論のすべてが目新しいものであったとしても，ゴッセンが労働理論（the theory of labor）を展開していたこと，そして彼の豊かな数学の使用は古典派と同じ過ちを犯していたこともまた付け加えておかねばならない。

8）ゴッセンによるイントロダクションの最後のパラグラフは予言的なスタイルで書かれており，メンガーが深い驚きをもって記した箇所の前に位置する文章では，キリストとコペルニクス双方の役割が作用することが主張された。

快楽主義的心理学の基礎は，メンガーにとって卑下しうる以上のものでさえあった。彼はそれらを**不適切な科学**(*inadequate for science*)と判断した。それゆえ，ゴッセンに関する彼の意見は，以下の手書きの注釈が示しているように，明解かつ決定的である。すなわち，

「ゴッセンは失敗した。というのも，彼の考えでは，(技術的)労働は驚くほど重要である。〔ここに一例を見ることができるが〕心理学的事実の領域における数学的手法が一切欠落している。彼が考慮しているのは快楽だけである—そして，人間の生命や(人生を通じて最高次の快楽であるはずの)幸福について，真に効果的なものはないというのである。バスティア(Claude Frédéric Bastiat, 1801-1850)[9]のように，労働と快楽しか考慮していないのだ…」[9)][10]

2.3. メンガーによる幸福と *Psyche* に関するアリストテレス的見解

それでは，経済学の出発点となる概念としての幸福は，メンガーがゴッセンの著作を読んでいる間に，彼が過ちを犯していると判断したように，心理学的な事実を必ず要請するものなのだろうか？　幸福は，経済学の心理学的基礎の根拠になっているのだろうか？　その疑問に答えて，メンガーは，主観的な幸福に関する観念は，現実的にベンサム的伝統を解釈する方法としての単なる快楽計算でもなく，単に「快楽(Genießen)」に酔いしれるだけの感覚を見出すような代替的な配列を選び出すだけの手段でもないという。心理学的洞察がなされた場合，経済主体の行為は，そのような根拠を経済学にもたらしている。つまり，方法論的にも戦略的にも，厳密な科学(a dignified science)として経済学を再構築するには，そのような洞察を受け入れるわけにはいかなかった。研究活動を通じて，経済学者は合理的で純粋な経済的原因を探究しなければならない。ここでは，メンガーの経済学方法論をより厳密に理解するために，彼のアーカイブズに注目し，メンガーが同時代の心理学よりも，むしろ古代ギリシャの**プシュケー**に関する概念が，経済学に最もふさわしいと考えていたことを明らかにする。

実際のところ，評者たちが重視してきたメンガーの公刊されたテキスト(バリー・スミスの1990年の論文で多少の引用がなされている)や，未公刊ノート(Campagnolo, 2002)の多くの文章から推察されうるように，**プシュケー**がメンガーの経済学における基本概念のひとつであることは明確である[10)]。メンガーの時代におけるウィーン大学では，古代哲学の勉強—とりわけアリストテレス—は，経済学者の間でさえ，まだまだ積極的に取り組まれていた。そのため，メンガーは，ヴントが構築しようとした行為を扱う実験心理学よりも，心理学的な洞察にふさわしい**プシュケー**の概念に好んで言及したのである[11)]。メンガーはまた，プラトンよりもアリストテレスの**プシュケー**の概念を好んでいた。そして彼は，魂と肉体に関する「**プシュケーと肉体**(*Psychè kai Sôma*)」という見解を受け入れず，特に感情の外皮であり理性を包み込む肉体に対して，感情と理性の主である魂に言及した。

9) そのノートは，メンガーが所持していた本の表紙の裏に書かれている。バスティアへの参照は，メンガーのノートでは—膨大な他の文章から明確に推察されるように—ほとんどの場合において非常に消極的である。この点についてはCampagnolo(2009)を参照されたい。メンガーは，自らの著作の至るところでノートの記述を発展させ，その出典を付すという活発な論調でもって，ここで引用した最終的判断におけるゴッセンに関するすべての批判を総括している。

10) より一般的には，オスカー・クラウスによるメンガーのアリストテレス主義に関する議論によれば，1883年の『経済学の方法』の付録7のなかで説明しているように，メンガーはドイツ歴史学派によるアリストテレスの扱いに反対していた。

11) 現在，パーキンス図書館に保存されているノートには，メンガーがヴントの研究に言及したものがある。

くわえて，**プシュケー**は，このように欲望の源として，特に「食べ物に対する必要はやがて落ち着くだろう(*E Psychè anapausetai*)」(クセノフォン，*Cyropedy*, 6, 2, 28)と述べられることもあるように，具体的な物的欲望(material appetites)の源でもある。ここでの**プシュケー**は，正確には，生得的な「お腹の」食べ物に対する欲望だけでなく，人間全体における食べ物に対する欲望を意味しており，全体的な満足を探し求めるものとしての人間の意図を表している。したがって，それは，同じやり方で物的必要を限定するわけではなく，物的必要を含むのである。つまり，すべての必要は充足するのを求めており，この意味において，**プシュケー**のギリシャ的観念が，当時の功利主義的あるいは快楽主義的な見解よりも広く包括的な概念であることをメンガーに理解させたのである。その概念は，メンガーが物的必要の充足(Bedürfnisbefriedigung)を説明する際に，確かにある程度の影響を与えており，その説明は1871年の『原理』第一章「財の一般理論」で扱われている。メンガーはまた，上述した三角形の論理に従って消費財を扱う場合には，どのような状況でも，(タバコのような単なる「安楽」財にすぎない財を含めて，あらゆる性質をもつ)消費財を生み出すためになくてはならない必要を，序列のより高いところに含めた[11]。実際に，そこには，主体が自らを危険な状態に置くことなく(最初に食べ物がもたらされる等)，「選好」を確実に序列化する秩序が存在する。主体は異なる方法で判断するかもしれないが，長期的には(あるいは，彼が死んでしまうと)選好を序列化することはできなくなるのである。

これまでの事実は，メンガーが主観的な幸福状態や幸福について厳密な理論を支持した理由を説明しているが，彼はまた，(アリストテレスの『ニコマコス倫理学』と同様に『霊魂論』に見出されるような)「自然的満足のものさし(scale of natural satisfaction)」といったギリシャ的テーマにしたがって分析をおこなっている。そのものさしは，生存に関する一般法則として理解されるものであり，「生存(survive)―生活(live)―より善く生きる(live well for higher purposes)」の三つの構成要素から成り立っている(「より善く生きる」は，動詞の「生きること(to live)」を意味するギリシャ語の“Eu zein”と，「善く(good)」を意味するギリシャ語の“Agathos”に対応する副詞を合わせた言葉である)。経済主体は，生活必需品について考えをめぐらせ，より望ましい状態を目指している場合，「自然的満足のものさし」にしたがって行動する。そのような行動には，経済主体の信条が含まれており，それは，所与の社会的・経済的・文化的な世界における幸福状態に関する経済主体の主観的観念を反映したものである[12]。このように，主体が目指す最高次の目的は，独自の見解(「真理を予期する」という意味の theoria)にあり，自らの行為について理論家―ひとりの経済学者―になるという意図を持ち合わせているのかどうか疑わしいだろう…。このような議論に結論を下すためにも，メンガーがアリストテレス(『霊魂論』，『ニコマコス倫理学』，『政治学(*Politics*)』)から得た考えについて述べた時に，まさに彼は自らの研究目的の中核に**プシュケー**の古典的観念を形成したのだ，という点を強調したい。

メンガーの同僚であり，1900年代にオーストリア帝国プラハ大学の教授であったオスカー・クラウスは，「アリストテレスの価値論と現代心理学派の学説との連関(*Die aristotelische Werttherorie in ihren Beziehungen zu den Lehren der moderner Psychologenschule*)」という論文で，アリストテレスの概念とメンガーの経済学との概念的関係を非常によく理解していた。それにも関わらず，クラウスが両者の概念的関係を推定したのは，『霊魂論』からの引用

12) このようにして，「精神的」必要を含んでおり，20世紀における「埋め込み(*embeddedness*)」(参考：カール・ポランニーやグラノヴェッターなどの表現方法)と呼ばれるものを発展させている。

文を題辞として書いたときであったと考えられる。『霊魂論』では，人間行為を理解するために最初に研究しなければならないのは**プシュケー**であり，それを適切に検討する場合にのみ，人間行為の他の側面にそれを持ち込むという議論が展開される。クラウスによれば，もちろん同様にメンガーにおいても，行為に関する真の理解には，経済現象が含まれており，クラウスにおいては，経済現象に関する知識が行動に対する理解に基礎づけられねばならないことを明らかに意味していた。しかしながら，そのことは，メンガーの1871年の『原理』で展開された理論や，同様に1883年の『経済学の方法』やその後のあまり知られていない著作で示された方法論とは大いに異なるものであった。

メンガーがアリストテレスに啓発されたことは疑いようのないことである。だが，メンガーは，当時の精神概念にもとづく経済学の形成を，結果として**プシュケー**の概念にもとづかせるかたちで描き出そうとしたのだろうか？　本稿の冒頭で言及したように，メンガーが当時の心理学の文献に明確な関心を示していたことは，アーカイブズから跡づけられるが，彼の考えによれば，快楽主義や功利主義に関係づける現代的な精神概念は，科学の実験的基礎を貫き通すものではなかった。そしてそのことは，クラウスがメンガー経済学の基礎とみなしていた心理学の議論を展開することなしに，メンガーを経済主体の経済行動を扱うように仕向けた。端的に言えば，メンガーは経済学を心理学的に基礎づけることについて，当時のドイツ語圏の諸国でなされていたことと同じように，まさに歴史学と同じ経路を辿って，経済学がたやすくひとつの科学(心理学)を従属させてしまうことを怖れたのである。

3. 『限界効用』に関する推論の心理学的方法の限界
――マックス・ヴェーバー，ルードヴィッヒ・フォン・ミーゼス，フリードリッヒ・ハイエクを手がかりにして――

メンガーは，心理学の主張から引き出した副産物にもとづく経済学の構築を，結果として観察するというよりも，むしろ経済学がそれ独自の基礎をもつべきであることを憂慮しながら経済学の展開を考えていた唯一の著作家ではない。メンガーが**プシュケー**を主体の本質(essence)として考慮したという事実は，一方の科学を他方の科学の基礎として扱うという考えに対して彼が徹底して反対したことと齟齬を生じさせるものではない。科学的原理の本質に働きかけるという理由から，ある科学を別の科学の適用可能な領域として容易に扱うという考え方に，メンガーは一切同意しなかったのである！

さて，問題は，メンガーの著作の読み手たちが，メンガーによる経済学の心理学的基礎づけの放棄にまったく納得しなかったために，「心理学派」という呼称が，メンガーや彼の学派を指し示す一般的な表現になってしまったことである。ドイツ語圏の文脈において，新興の「オーストリア学派」は「心理学派(Psychologenshule)」と同定されるようになっていた。では，実際に両方の科学は分離されたのだろうか？　あるいは，そうではなかったのだろうか？　それとも，科学の枠組み，基礎，目的，そして方法に関して，まったく学問間の分離がなされていないのだろうか？　評者たちはこれらについて，経済学を心理学的基盤の上に築きあげたことがメンガーの研究成果であると評価したのである―けれども，メンガー自身は，それとは異なる目的を持っていた。カオラやルーヨ・ブレンターノなどの当時の経済学者や心理学者の多くは，評者たちと同じようにメンガーを理解していた。彼らはメンガーの著作

を誤解していたのだろうか？　クラウスに見られるような意見は，明らかにいくつかの問題を生じさせた。われわれは，メンガーの研究をめぐって少しずつ議論を進めていき，「オーストリア」学派を「**心理学派**」と呼ぶことで評者たちが正当化した範囲がどの程度であったのかについて，再び探求していく以外に選択の余地はない。

評者たちが主に言及したのは「限界効用の法則」であった。彼らは，この法則を，時間の経過とともに受け取られた快楽量の強度が減少していくことを示す「精神物理学の」（そして，いくらか「生理学的な」）法則から導かれるものとして理解していた。メンガーよりも前に，ゴッセンが「限界効用」の考え方を明らかにした際の方法について思い起こせば―メンガーが快楽主義に反対していたことは前述したとおりである―，メンガーが『原理』第二版の出版を延期させている間に，ゴッセンの方法は，経済学者たちの分析に浸透していったのである。そのため，上述のいくつかの疑問に対する返答は，科学的ではないにしても，深くて幅広い，慎重なメンガー研究の最もよい例を示したマックス・ヴェーバーによってなされることになった。厳密な意味でのオーストリア学派のメンバーたち（ヴェーバーは，すでにシュモラー〔Gustav von Schmoller, 1838-1917〕の「社会政策学会（*Verein für Socialpolitik*）[12]」に属していた）[13]や，特にメンガーの**孫弟子たち**（*Enkelschüler*）は，実際にメンガーの遺産について議論を展開していた。彼らは，経済学のなかにいくらかの心理学的な見解を認めていたのだろうか？　また，後の世代について検討する限り，メンガーの著作の読み手に，いくつかの手がかりが関係しているだろう。

13）だが，ヴェーバーは，シュモラーの「新歴史学派（Young Historical School）」に対抗するものとして，「最新（Youngest）」歴史学派―*die jüngste historische Schule*―を実現させた。

3.1. マックス・ヴェーバー
――経済学への疑問の呈し方，異なる科学の別々の扱い方――

必要の**支配可能性**（*Verfügbarkeit*）に関する概念と同様に，必要の充足に関する主観的概念の問題は，明らかに新たな「純粋」経済学の中核をなしている。幸福を考慮する限りにおいて，クラウスや他の人びとによる「心理学派」という呼び方には，問うべき価値がある。しかしながら，1900年代の転換期に，多くのドイツ人の学者たちが，社会政策学会の強力な代表者であったシュモラーに追随していたのに対して，これらオーストリアの限界主義者の多くが「純粋経済学」の内部に，そのような主観的概念をめぐる「心理学」の枠組みの考え方を取り入れていたことを指摘しなければならない。労働価値説に関するイギリスの古典派（そして，リカードウの概念を継承しているという理由でマルクス主義）とドイツ歴史学派の両者の戦いは，辛辣なものであり，そして心理学を介して現実の理解に努めることは，その直後に生じたいくつかの集合概念（*Kollektivbegriffe*）から提起されたものであったのかもしれない。そのような概念のなかで，例えば，用語として明確に表現される *Volkswirtschaftslehre* は，ある国民（*Volk*），すなわちおそらくはドイツ人に適した経済（*Wirtschaft*）に関する学説（*Lehre*）のことである。そのことは最もよく受け入れられた特徴であった。同時に，そのような概念を放棄することは，**方法論的**かつ制度的な戦い（方法論争〔*Methodenstreit*〕が方法論と制度論の両者を結合した）へ向かうことを意味した。このように，欺瞞的な**国民**ではなく，むしろ個々の主体の「暗黙的な」性質を形成するために，メンガーは心理学に関心を抱いていたのである。それにも関わらず，メンガーは「純粋経済学」を展開するという目的のために，心理学的な基礎づけを行うことを容認することができなかった。

マックス・ヴェーバーは突如として，経済学と心理学を混合させたやりかたを批判した

理由を，1908年の論文「限界効用理論と精神物理の基本法則(*Die Grenznutzlehre und das psychophysische Grundgesetz*)」で述べた。ヴェーバーは，メンガーの後継者たちがメンガーの思想を正確に理解していなかったと考え，限界効用の推論方法の基礎が単なる実験心理学の法則の適用であったにすぎないと主張した。評者たちが頻繁に持ちだした根拠は，後に「精神物理学の法則」としてよく知られるようになったものにあり，それは，ヴェーバーとフェヒナーという心理学者たちに厳密に定式化された法則であった。

ゴッセンの第一法則の段階において(快楽主義的仮定ではなく，むしろ実験的手続きの結果としてではあるが)，満足の強度と時間との間には逆の関係が存在することを指摘した。次のステップが，彼／彼女の欲望が(空腹やのどの渇きといった)必要の感情を満たすような財と一致する場合の，個人による財の評価を考慮することであるのは明らかであろう。諸実験はいつも結果が得られた時点で終了していた。多くの経済学者たちは，そのような分析を応用した結果の続きとして自らの科学を構想しており，そして，そのような心理学に忠誠を誓っていた。マックス・ヴェーバーは1908年の論文のなかで，このような方法がどれほど多くの誤解を生んだのかを明らかにしたのである。

すでに述べたように，メンガーは，心理学の応用的発見として経済学の概念を下支えするというゴッセンの快楽主義の考え方を批判した。マックス・ヴェーバーは，Kraus (1905)[14] や Kaulla (1906) そして，Brentano (1908) に注目した。それらの論文は，「心理学派と経済学(*psychologische Schule der Nationalökonomie*)」の方法から限界主義の解釈をおこなっており，価値に関する限界効用理論を展開した他の論文よりも多くの人々に支持された。皮肉なことに，歴史家クニース(Karl Gustav Adolf Knies, 1821-1898)[13]の弟子のひとりは，メンガーの理論的試みを擁護し，ヴェーバーは，経済学の心理学的基礎づけに対抗して，公正さといくつかの論争をふまえて純粋な**限界効用理論**を論じた。マックス・ヴェーバーは，以下の点を指摘している。すなわち，

1) 純粋かつ経験的に，科学が理論的な方向へ向かうことを主として求めていた純粋経済学に，ヴェーバー＝フェヒナー法則が適合することはなかった。メンガーは，あらゆる経験的基礎に見合うことのない基準を模索し，因果的な演繹の役に立たない事実を―メンガーのいう「現実型」(Realtypen)と経験的事実に関連するものであれば何であれ―を探求した。ヴェーバーは効果的な現実性に関する科学(Wirklichkeitswissenschaft)に特異性を求めていたが，彼らは理論の一致を見ていた。

2) ヴェーバー＝フェヒナー法則と純粋経済学に見出された定理は，必要性(Bedürfnissen)や満足度(Sättigung)，個人の関心により導かれた研究の方向性など，類似した概念を使用しているようにみえるが，両者がもたらす内容の詳細が一致するわけではない。心理学者は精神の諸形態を研究するが，経済学者は行動の動機を探求する。また，心理学者と経済学者が自らに課す目的も一致していない。心理学者は精神がなぜそのように作用するかを理解しようとするが，経済学者は精神の探求はおこなわず，与えられた事実として精神を捉えるのである。

3) このように，方法だけでなく目的もまた異なるため，科学は厳密に分離されねばならない(**厳密な分離**〔strenge Trennung〕は双方のために必要である)。経済学者たちは，内省的あ

14) クラウスは，メンガーにその論文の別刷りを送っていた。だが，メンガーはそのタイトルのなかに「心理学的」という用語に線を引いて削除した。立証すべき指摘が欠落してるため，彼の反応を推察することは難しい。

るいは行動的に交換過程に関する合理的な理解を構築する[15]。

メンガーやヴェーバーは，理論を経験則にもとづかせることができなかった。理論は，それ独自の概念を有している。そして，経済学に求められた理論には，心理学に求められた理論との厳密な分離が**必要であった**。クラウスの基本的な考えは，経済理論家たちの一定の層が他の科学者たちに頼っているというものであった。そのような見解に対してヴェーバーは，心理学と経済学をまったく区別しない人びとによる方法を分析し，彼らが混乱を生じさせる方法で科学を推し進めていることを示した。例えば,「最適」概念が意味するものは，（メンガーや，他の多くの人々において）経済学者の文章や計算であって，「快楽の最大化」に関する心理学者の概念から導かれるものではない。より一般的に，存在論的に，そして方法論的に言うならば，ある科学の構築が，別の科学から導出される結果に変化を加えたものに依存している場合，そのような科学の将来が明るいものになることは絶対にない。

実際にヴェーバーは，経済学だけでなく，すべての社会科学において，科学と科学の関係をあいまいに扱うことを批判した。彼はこのようにして，現実の性質を理解する独自の観点から各々の科学を規定するという観念をメンガーと共有しており，そしてメンガーと同様に，科学の領域は，所与の存在論に依拠しているのではなく，適切な解決方法によって決まるのだという問題に取り組んだのである。アリストテレスや，より一般的には，純粋な因果論において，理論科学はその領域に生じる現象の一般性を扱うべきであって，他の科学のどのような結果をも信頼すべきではない。それとは対照的に，歴史科学は単一の出来事を取り扱い，実際的な科学（ファイナンスなど）は，行動に関する分析の領域内に応用理論を持たねばならない。このようにして，科学は，その適切な基礎をそれぞれもつことで，われわれに現実の諸側面を理解させる。つまり，経済学における適切な基礎は，交換に関する一般法則なのである。理論は，独自の正当性を持つものであり，歴史的なデータや心理学，さらに実験のいずれにももとづくものではない。多くの場合，経験は，理論家が取り扱おうとする主題如何にしたがい，彼が構築しようとしているものがどのような形態なのかに対する洞察をもたらす。同様に，ありとあらゆる科学は，特定の事実を問題にしているのであり，さらにすべての科学は，多くのありうべきアプローチや現実の様相を説明するのである。したがって，究極的な**科学の女王**（*Regina scientiarum*）など存在しない。メンガーとヴェーバーは，その点に同意している。彼らは，そのような観点が普遍的であると考えており，ある科学が別の科学の基礎を提供するという発想を全く考慮していない[14]。

特に，実験心理学は徹底した純粋経済学の基礎になりうることはなく，また，精神物理学の法則は，当時の多くの心理学者にとって単なる実験結果でしかなかった。しかし，この論法はまた，理論心理学にも向けられている。こうして，メンガーの科学的理解も，ヴェーバーの科学的理解も，そのどちらも精神の分析的基礎について，人間行為に関するひとつの包括的な学説となりうることはなかった。心理学の存在論は，経済学が独自の存在論を形成するための強みでもなければ，経済学が依存している**基礎**でもない。さらに，ニュートン理論が自然科学において成したように，心理学が「精神の科学」（*Geisteswissenschaften*）に等しいということを信じる科学者がいたが，ヴェーバーは間違いであると考えていた。

15）局所的にではあるが，実験経済学から描き出される誘惑が再び生じていることが，経済学者のコミュニティによって認められていることを書き留めておく―最近，ヴァーノン・L・スミスとともにノーベル賞を受賞したカーネマンは有力な事例であろう。

独自の存在論を他の科学に期待するような学問は，科学の名に値しない。人間行為全体の真の基礎は，経済学や心理学が提供するのではなく，もちろん経済学と心理学のどちらも**精神科学**の全体を包括することはないだろう。ヴェーバーはここで，メンガーについて繰り返し述べている。メンガーに関して，（アリストテレス流の本質主義という理由から）彼が「現実主義者（realist）」であるということがときどき議論されたが，メンガーは，主体の主観性が単なる心理学に還元されることがほとんどない場合であっても，経済学に存在論をもたらすことを注意深く避けていた。メンガーによって描かれる主体は，「現実の」ひとつの「形式」である。その主体は，純粋経済学の分析の一要素として，そのように描かれ，理解されている。そして，ヴェーバー的な**理念型**との関係はそこから生じているのであるが，この点に関するより詳細な議論は，本稿の対象ではない。

反対に，1900年代の「心理学」がどのように作られたのかを簡単に振り返ってみよう。当時，心理学は変化の途上にあり，内省的枠組みから実験的枠組みへと展開しつつあったため，「精神の科学」に関するさまざまな性質を強調していた。そして，「非合理な」ものを分類することが議論の対象でもあった[16]。ヴェーバーが大きく取り上げたように，ヴィンデルバンド（Wilhelm Windelband, 1848-1915）やリッケルト（Heinrich Rickert, 1863-1936）は，自由（liberty）に関する素朴な理解をも批判した。彼らは「形式」を，「現象世界の完全に経験的な現実性（*die volle empirische Wirklichkeit der Erscheinungswelt*）」を説明する際の「境界」として理解した。このように，多くの科学者の見解では，特に歴史家の見るところでは，人間の自由な行為は忘れられたのであり，また，機械的に人間を把握できないようにしたのである。

当時，社会の現実性が厳密な研究の対象になっていたのなら，形式は適切な分析道具であっただろう。同様に，医学的な精神分析，心理学，経済学などは，独自の領域を作り上げていただろう。メンガーやヴェーバーが執筆していた当時，実験心理学は最盛期を迎えていたのだけれども，このことは，人間生活のすべての側面やあらゆる人間科学を，独自の特定の領域に立ち返らせるにいたった十分な理由ではない。ヴェーバーは心理学を否定しており，実のところ，人間行為の基礎的な科学になりうると主張するあらゆる社会科学を否定していた。そのような精神に関する研究が，すべての人間科学の階層（the hierarchy）に作用することを理由に，「真の本質」を導出することを目指していたという考えは間違いであった。ヴェーバーは，メンガーの方法論的個人主義（この言葉は後に作られた）を支持していた。しかし，社会的現象や経済的現象，そして精神の心理学的事象を同じように考えることができなかった。

メンガーは，他の経済学者たちの心理学的基礎に関する研究もまた否定しており，彼独自の専門用語や社会科学の新たな分類を提案した。心理学が単に危機に瀕しているわけではないことは，前述したように[17]，歴史的科学，理論的科学，実際的科学という彼の三つの区分からも推論されうる。メンガーは，それぞれのアプローチに対して，それらが達成しうる以上の成果を要求することなく，他の分野と部分的にも重複させないかぎりにおいて，それぞれの学問独自の正当性を理解する。それから，実験的知識

16）もちろん，ヴェーバーは方法論的概念として，独自の理論的目的に適合するような**不合理性**に関する概念を作り出している。ウィーンでは，「不合理な」自我に関する研究が早くも始まっていた。そのことはどちらにせよ，明らかにメンガーを確信に至らせるようなものではなかった。しかし，ここでは，（例えば，フロイトに関する）草稿は，ほとんど存在しない。メンガーの時代は，むしろ実験心理学が隆盛となる時代であった。

17）この点については，Menger（1883）の付録4とMenger（1889）による全体的な解説を参照されたい。

が理論的立場の基礎を提供しえないということは，まったく自然的なことなのである。他方，理論とともに，心理学は精神について検討すべきであって，「社会現象」（*Sozialerscheinungen*）における個々の交換の分析を行うべきではない。経済主体の主観性は，初歩的な経済原理であると考えられており，他のどのような分野においても予め知ることは不可能なのである。

メンガーと同じく，ヴェーバーが探求した様々な種類の「形式」は，数学的にモデル化された選好をもつ抽象的な**ホモ・エコノミカス**を探求したものではなく，心理学によって仮定された実験的な「内的意識」や，後の認知科学における「神経からなる精神的人間（neuronal mind-man）」を扱うものではない。それゆえ，メンガーに始まるオーストリア学派の後の展開を説明しようとする場合，心理学の役割に関するいくらかの手がかりが，有効なものであることが示されるだろう。ミーゼスの『ヒューマン・アクション』やハイエクの『感覚秩序』から，彼らの心理学の扱い方について二つの事実が明らかになるだろう。

3.2. 後期オーストリア学派における心理学——主観主義が感覚分析や精神に関する認知心理学に展開されたのかを問うミーゼスやハイエクに関するいくつかの言及——

メンガーは心理学のトピックについてほとんど明らかにしなかったけれども（それに関する彼のメモ書きは非常に多い）[18]，その後，ミーゼスとハイエクの両者は，主体を理解する場合の中心に位置づけられるものが，「幸福」よりも，むしろ必要の充足（*Bedürfnisbefriedigung*）に関する主観的な感情にあると考えた。現実の人間行為を分析の出発点とする経済学者にとって，「方法論的個人主義」として知られているメンガーのアプローチは，唯一の理にかなった方法として示されるものであった。ミーゼスがそのような前提にのみ基礎を持つ人間行為学（praxeology）を主張したことはよく知られたことであるが，彼はその一部に経済学を含めていた。集計的な集合体の動きを想定する理論は，分析の出発点からは放棄される[19]。だが，ほとんどの心理学派に共通するように，個人を分析上の基礎に置くこと（それは行動心理学で定義された考え方である）は，経済学の基礎として十分に役に立つのだろうか？　そのような観点は，ヴェーバーが「**心理学派**」として警鐘を鳴らした混乱の源と同じ論点をもつものである。

『ヒューマン・アクション』（1949年）におけるミーゼスの分析は，その点を明確に区別しており，このような科学間の分離を絶対的な第一公理として提示し，主体が行動する場合の究極的な与件としたのである（第Ⅰ章第3節）。しかしながら，そのことと「心理学的な」教義は無関係であった。というのは，そのような無関係性は，彼が構築しようとした科学（彼が人間行為学と呼んでいるもの）の前提なのである。したがって，ミーゼスの分析は，「心理学的」立場ではなく，方法論的立場を支えるものである。この点が認められるならば，それに続く議論もまた（正確に演繹しているならば）受け入れられねばならなくなる。このようにして，（行為をおこなう）諸主体は，（どのようなことを意味する場合であっても[20]）「精神」に関する問題解決を

18）しかし，「オーストリア的伝統」内部における全体的な問題のサーヴェイは，もちろん本稿の範囲に属するものではない。

19）メンガーにおいても，それらは歴史などにおいてではなく，**理論のくだらない発想**であった。フレイとベンツ（2004, p.65）は，その問題が（メンガーの傾倒した方向性を継承する多くの人びとのように）**存在論的に全体として考慮される場合の市場**に関してもまた生じるだろうということを想起させる。

20）例えば，もし形而上学者たちが決して「心身」問題（Mises［1949］の第Ⅰ章第6節を参照）に関する解決に成功をみないなら，ミーゼスは，われわれは（われわれ独自の行動にもとづき，この原理でもって他人の行動を予想して）あらゆる行動に必要なすべてを想定するある種のつながりを受け入れ

探るための基礎として想定されているわけではなく，「取引(trade)」の協同に関する問題解決のために想定されている。行動の分析においてその点は，考慮の対象であって説明の対象ではない現実の「精神的な事象」ではなく，分析を開始する際の「形式的な性格や先験性(formal in character and aprioristic)」に関する絶対的にアプリオリな証明なのである(第Ⅱ章第2節)。公理から導かれる(その著作の大部分を占める)交換，所有，契約などは，独自の前提条件に結びつけられた厳密な因果関係なのである。

主流派経済学とは対照的に，ミーゼスの構想において真理(truth)は，「現実性(reality)」を背景にしたモデルを検証することによって確認されるものではない。現実性は，理論の対象と同じように，究極的には理論の内部に組み込まれるものである。**プシュケー**に強い関心を抱いていたメンガーとは対照的に，ミーゼスは，科学(人間行為学)の領域に関心を示すような「精神」の研究を否定した。ただし，メンガーにとっても心理学が経済学を基礎づけるような学問として存在していたわけではないということは，すでに明らかにした通りである。しかしながら，再度メンガーとは対照的にミーゼスが提示しているのは，社会的領域に関する包括的な理論と一貫性がある内容をいくつかの原理に含めるという考え方である。さらに，「人間行為学」が答えを持ち合わせないような問題は，学問の名前に見合った価値を(社会現象に関する)科学の内部では見いだせない問題であるとして簡単に放棄される。後者の問題では，文化に従って伝統や教義の仕組みなどのあらゆるものから，別の方法を取り出すと考えがちだからである。文化が危機に瀕しているどのような状況においても，唯一の普遍的な公理が真であり続けるという考え方は，必要，時間，無知などを与件とした場合，人間は行為をおこないつつ，互いに働きかけるというものであるという。一方で，そのような考え方は，心理学に依存することなく議論を展開していく。

ハイエクの場合，ミーゼスとはまた対照的に，彼の世界観では心理学は主要な役割を演じるものである。よく知られているように，ハイエクは，理論心理学の基本事項に関する驚くべき革新的な「再生(revival)」を1950年代に『感覚秩序』のなかで宣言した。当時の認知心理学や研究され始めていたサイバネティクス(人工頭脳学)は，知識に関する驚くべき方法を切り開いており，経済科学に関する重要な論理的帰結を含んでいた。メンガーに見られる心理学に対する関心は，このようにして，ひとりの自称後継者と名乗る者によって再び現れてきた。

それにも関わらず，多くの経済学者たちにとって難解であり続けたことは，何と言っても『感覚秩序』に経済学の内容をほとんど見出すことができないということにあった。ハイエクはかなり徹底して議論を展開しており，その研究は明らかに彼の思想の革新をなしていた。さらに，序文の最初のページでハイエクが説明しているように，若い時，彼は心理学者としての経歴と経済学者としての経歴のどちらをとるかという板挟みの状態にあった。彼は，非常に深い関心を心理学に寄せていたので，かなりの年数を経てもなお，心理学の重要な論点を常に意識していたことをあるエッセイのなかで述べており，最終的にそれらの多くの論点を『感覚秩序』で公にしたのである。このようなハイエクによる晩年の主張は，メンガーによる学問的見解から離れていたのだろうか，あるいは，近かったのだろうか？

実際のところ，ハイエクは，ある研究報告のなかで，一方において『感覚秩序』には経済学の驚くべき欠落があることを，他方においては，経済学もまた心理学的要素を欠くことを明らかにするつもりであると指摘した。つまり，ハイエクによるその報告は，さまざまなレベルで厳密な研究方法を妨害することのない，まさにメ

ることでより良い状態をもたらすだろう，と書いている。

ンガーと同じ方法を採用するのであった。ある学問が自らの領域内で諸事実を明らかにしようとする場合，他の学問的諸要素が混乱を招くことはない。同じ方法論が二つの領域において適用される場合であっても，このように双方の領域では，それぞれの構築する原理が独立したまま議論が進められる。そしてハイエクは，社会科学の方法論や認識論の論理的な問題に直面したために，理論心理学に立ち返ると書いたのである。一方の科学を他方の科学に基礎づけるためではなく，むしろ並列的な関係が二つの領域に貢献するであろうとハイエクには思われたのであり，彼はそのような秩序を適切に表現する形態をカタラクシー[21]と呼んだのである。

経済学のなかで心理学の役割を考慮するメンガーの見解を継承していることについて，ここで結論づけるようなことはできない。しかし，(『感覚秩序』の第一章第一節のタイトルでさえあった「意識とは？」という)ハイエクが後に検討した伝統的な問題が，単に経済学が答えを持ち合わせていなかったという点を付け加えねばならない。その理由は単純なもので，経済学は，そのような問題を経済学独自の問題として認識することができないというものである。哲学的伝統に関する長年の議論(「心身二元論」―正確にはミーゼスが予防的に取り除くことを意図したもの)も，そしてメンガーの時代から1950年代までの間にずいぶん変化した心理学研究の展開も，そのどちらも経済分析の基礎に心理学の領域を形成していないのである。

むしろ対照的に，20世紀の経済学における新古典派的な考え方は，近年にいたるまで誠実なまでに心理学から距離を置き続けた[22]。オーストリア学派の経済学者たちは，むしろはっきりと区別できることが良いと考えた。少なくともメンガーやハイエクは心理学に関心を明確に示していたが，そのディシプリンを理由に，ハイエクはその領域を認知科学の新たな方向性へ乗り出すことによって厳密に分離した。当時，彼は，メンガーがすでに知っていたような多くの事例を用いたけれども，伝統的に心理学を考慮することについては，1900年代の学生として，かつてのウィーンの象徴であったヘルムホルツ，ヴント，ジェームス，ミュラー，そしてマッハといった人びとの著作を読むことによって吹き込まれたのである。ハイエクの心理学研究は，オーストリア学派そのものではなく，オーストリア学派経済学に並走するかたちで，オーストリアにおいて示された当初の方向性を発展させることを意図したものであった。

『感覚秩序』のなかで経済学についてほとんど何も述べなかったハイエクは，ジェームズ・ミル(James Mill, 1773-1836)やジョン・スチュア

21) ここでその研究は扱わないが，科学の類型化を扱う部分のパラグラフにおいてさえ，ハイエクは，ひとつのレベルから複雑な次のレベルを理解することが不可能であることを生得的に暗に意味しているとして，有限的な意識に関する特殊性を結論づけたと言えるだろう。ハイエクによって採用され，多くの層を形成した体系的な見解はよく知られている。『感覚秩序』の第8節87項から終わりまでを参照のこと。評者たちは同じ見解を抱いた。後段を参照されたい。

22) はるか後に，例えば最近ではカーネマンやツベルスキーにおけるように，その問題が，経済主体の行動パターンにおける例外を観察することや，メンガーの教えに沿って個人行動の無知や時間について説明することを通じて，しばしば再び生じてきた。一見したところ新しいように思われるものは，問題が再び生じる際に表される価値判断を根拠としており，「経済学において創発的な心理学」に関する問題に対する答えを提供することに根拠をもつ。読者には，とりわけ効用最大化が異常をもたらすのがどのくらい生じそうであるのか―「サンク・コスト」として容易に説明される多くの事例，そのように簡単にはいかない異なる所与の構想にしたがって「転倒した選好」のような他の事例―を説明することを意図したカーネマンやツベルスキーの有名な研究(特に，ノーベル賞以降の研究)を参照されたい(彼らは，主体を「非合理」と呼ばない一方で，経済学者たちに対して，受け取った情報に関する主体内での「処理(processing)」について説明するよう強制した)。ある手がかりは，情報が市場によって与えられうる多くの方法に依拠する。

ート・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)といった人びととは対照的に，またメンガーでさえはっきりと取り上げることのなかったことを，その著作のなかで引き合いに出しており，このような別の伝統を非常に明瞭に描き出した。当時，ニューロンに関する問題は，それ自体が興味深く，たとえ彼の市場に関する理解と並行して議論することが求められていたとしても，ハイエクは，独特なオーストリア的方法とは一線を画した研究をおこない，他の種類の説明を必要とするような進化的／認知的な領域の将来的な発展を告げていたのかもしれない[23)]。

結論

多くの評者の後に，(重視されるべき)アーカイブズにもとづいて，限界効用の歴史を専門とするエミール・カウダー(Kauder, 1957)は，メンガーの枠組みの基礎的部分にアリストテレスの見解があることを明らかにした。それは，プシュケーの研究に関するものであった。だからこそ，精神に関する古典的理解は，功利主義と快楽主義の双方を批判したメンガーの価値論と一致したというものである。精神に関する同時代的な見解は，純粋経済学を発展させるための堅固な基礎ではなく，また社会的領域の研究に適用させることを目的にして心理学に取り組ませるものでもなかった。社会的領域を扱うために経済学が用いることができたのは，せいぜい歴史学であった。ヴェーバーが後に説明したように，そのような領域では，類似した諸概念を扱っているように考えられていたが，それらの諸概念が他の本質的な原理を提供することはなかった。1900年代は，ドイツ語圏の新たな経済学に対して心理学の影響が次第に増大していくことの帰結を観察するには，もっとも適した時代であり，メンガーの『原理』(1871年)，『経済学の方法』(1883年)，それに続く**方法論争**を運命づけた。経済学は，その名を擁護するようなものでなければならず，心理学的なものをめぐる単なる解釈であってはならない。ところが，学術界の戦略以上に，科学それ自体は，「**心理学派**(*Psychologenschule*)」の呼称を受け入れるか否かに対して危機的な状況にあった。

本稿で議論したのは，メンガーの伝統において経済学は「心理学の法則(a Law of psychology)」に基礎をもつことはないということである。反対に，ある意味で，本稿におけるこのような主張は，ゴッセンのような先駆的な限界主義者と同様に多くの古典が議論をしていたこと，そして本稿がこれまで明らかにしてきたように，メンガーが双方の研究を非難していたということである。その直後から続く伝統は，オーストリア学派の理論的基礎と同時代の心理学理論の間に類似したものを見出すことに夢中であり，そしてそれはメンガーの推論を適切なかたちで正当化することではなく，歴史学派との差異を強調するために行われた。その後，1950年代にハイエクが特殊な『感覚秩序―理論心理学の基礎に関する研究』(1952年)のなかで認知的アプローチを採用した際，彼はオーストリア学派の端緒をその書籍に直接的に結びつけ，心理学と経済学を完全に別々のかたちで扱ったのである。とはいえ，彼は類似した傾向を見ていただろう。

オーストリア学派の創始者が実際に関心を示した心理学の内容は，初期の評者たちやヴェーバーのような注意深い読者たちによって思案され続け，あるいはまた，オーストリア学派の後継者たちにとってそれは，科学と科学の混乱を批判することや，ヴェーバーのように基礎的な心理学と限界効用理論(*Grenznutzlehre*)との

23) ハイエクの研究ではなく，メンガーによって開始されたとするオーストリア学派が本稿における関心であった。それゆえ，われわれは，ハイエクの後期の試みが，理論心理学における彼の洞察にもとづいて経済学の領域におけるもうひとつの新たな「心理学」派を構築したかどうかについてさらに進んで問わないだろう。その点については Smith (1997)と Tuerck(1995)を参照されたい。

「厳密な分離(*strenge Trennung*)」を主張することに求められた。

端的に言えば，経済理論を経験的諸法則に依拠させることはできない。経済理論は独自の概念を有しているため，心理学の領域から経験的諸法則を借りてくる必要などない。結局のところ，経済学に適合的な理論は，それ独自の土壌で成長するため，とりわけ根本的に経験にもとづくならば，他のいかなるディシプリンを持つ理論とも切り離される必要があるのである。それゆえ，メンガーと同時代の多くの学者たちが悪意を込めて主張したにも関わらず，そして，彼の分析が個別の主体それ自身を軸として展開されたにも関わらず，オーストリア学派の創設者は，自らの研究を心理学的に基礎づけられたものとして理解しなかった。

経済学の専門化にともない，最近になって心理学と経済学の結びつけるテーマの高まりと復活がみられるようになってきた。一方において，それらは，主体の分析枠組み内における大きな乖離に，とりわけ(数学的に定式化されるが)計量経済学のモデルにおける大きなずれを観察することにほとんどがもとづいている。他方で，経済的な問題につながる諸領域に認知科学がもたらした目覚しい成果は，認められねばならないであろう。これらのことが1952年にハイエクが予想した方法に沿っているかどうかについては，本稿の議論の範囲を超えるものである。だが，メンガーの考え方を参考にして，さらに議論を推し進めるような結びつきが存在するのだろうか？

1900年代のウィーンでは，さまざまな学説が全盛を極めており，次の世紀の全体に対して—そして，21世紀に対してもそうかもしれないが—いくつもの考え方を十分なほど提供したのである。そのことは，もしかすると，危機的状況にある諸概念を解決するためのもうひとつの絶好の理由かもしれない。つまり，メンガーが知っており，尊重しつつも決して取り入れなかった他の人々の努力とメンガーの努力とを区別するための，より望ましい根拠である。より深く考察する場合，評者たちによって明確に正当化された主張には，正当な理由がないであろう。反対に，いくつかの納得のいかない言動には説明が必要であり，とりわけ経済学と心理学の関係に対して認識論的な関心をもつ哲学者には説明することが要請されるだろう。特に，今日の認知科学は「**心理学派**(*Psychologenschule*)」という呼称を構築した類の「帝国主義的」主張を誘導してしまうかもしれないからである。しかし，この探求には，再びもうひとつの物語を編む必要があるだろう[24)]。

訳者注

[1] *Carl Menger* は，2004年から2007年にかけてカンパニョーロ博士を中心に，オーストリアならびにフランスの研究者たちによる研究プロジェクトの成果である。それはまた，フランスで開催された国際会議の予稿集としての意味をもつものであった。その国際会議の組織者を務めたカンパニョーロ博士は，各報告者に厳密な研究成果としての論文を著すことを課し，それらを一冊の本にまとめたのである。*Carl Menger* の特徴は，各執筆者による丹念なアーカイブ・ワークにもとづいていることにあり，オーストリア学派の外側からこれまで明らかにされてこなかったカール・メンガーの思想側面を明らかにすることにあった。副題に含まれる‘New Findings’という言葉は，そのような特徴を反映したものである。カンパニョーロ博士によれば，Karl Milford (Universität Wien) による‘Inductivism and Anti-essentialism in Menger's Work’(pp.59-85)，Peter

24) 実際に，ここには多くの物語が包摂されている。次の点にのみ言及しておく。すなわち，特質(qualia)をめぐる議論は，哲学者，経済学者，認知学者たちが，多くの共通する学際的研究にどれくらい関心をもっているのかを明らかにするだろう。それは，遠くから経済学に対する関係を生じさせるだけであり，実際には議論は活発ではない。十年も続いていないが，その議論は，Dennet (1991)やChalmers (1996)や他の学者たちによって開始された方法に沿って未だ継続している。

Rosner(Universität Wien)による‘Liberal positions in Carl Menger's writings’(pp.127-147)，Pierre Livet（University of Provence)による‘Cardinality and ordinality in Menger's framework’(pp.187-200)，Jean Magnan de Bornier（Aix-Marseilles School of Economics)による‘Comparing Menger and Böhm-Bawerk on Capital Theory’(pp.217-232)が，とりわけ既存のメンガー研究に大きな貢献をするものであるという。

[2] カンパニョーロ博士は，メンガーの主著『国民経済学原理』のフランス語版を出版するなど，フランスを代表するオーストリア学派研究者である。彼と日本との関係は一橋大学にあるメンガー文庫をきっかけにしている。まず1997年から1999年まで東京大学および一橋大学社会科学古典資料研究センターにて在外研究を行い(日本学術振興会)，2007年から2008年にかけて京都の国際日本文化研究センターの客員研究員として，そして2011年より2012年4月まで北海道大学大学院文学研究科にて客員研究員(日本学術振興会)として研究に従事した。

[3] その傾向は，ミクロ経済学の創始者アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)において顕著である。その代表的な研究に，Tiziano Raffaelli(2003)*Marshall's Evolutionary Economics,* Routledge.，西岡幹雄(2003)「産業の特定地域への集中と経済集積」『経済学論叢』(同志社大学)，54巻4号，67-97頁 .，Simon Cook（2009）*The Intellectual Foundations of Marshall's Economic Sciences: A Rounded Globe of Knowledge,* Cambridge University Press.，松山直樹(2010)「A.マーシャルにおける心理学研究と経済学との連関」『経済学史研究』，51巻2号，51-67頁。などがある。

[4] このようなカンパニョーロ博士による視座は，オーストリア学派経済学研究においては，とりたてて目新しいものではない。例えば，メンガーの経済学方法論のなかに形而上学を見出した代表的な研究として，東清二郎(1985)「メンガー経済学の方法論的性格」『江戸川学園人間科学研究所紀要』，第2号，137-191頁がある。東(1985)によれば，メンガーの経済学には，歴史的経済学，理論経済学，実践的経済学の三つの区分があり，特に理論経済学に注目する場合，それは精密的理論経済学と経験的理論経済学に分けられるという。それに対して，経済学の隣接領域として，メンガーは有機的社会現象を取り上げており，原子論的方法による精密的理解と，集団主義的方法による経験的理解という二つを指摘したという。東(1985)は，理論経済学における精密的方法を中心にメンガーの方法を検討する際，メンガーの立場をアリストテレスと結びつけて解釈する場合と，新カント派と関係づけて解釈する場合に分けている。さらに，前者の解釈の先行研究に，エミール・カウダーの*A History of Marginal Utility Theory* (Princeton University Press. 1965. 斧田好雄訳『限界効用理論の歴史』嵯峨野書院，1979年，ならびに，Intellectual and Political Roots of Older Austrian School, *Zeitschrift für Nationalöeconomie*, XVII, No.4, 1958を取り上げている，後者に関しては，杉村広蔵(1935)『経済哲学の基本問題』岩波書店を挙げている。このような先行研究の批判的検討を通じて，東(1985)は，前者の解釈について，知識の厳密性は現実の対象の固定性に由来しており，厳密な知識と現実的な知識を同一視したアリストテレスに対して，メンガーは，知識の厳密性が方法に依存することから，厳密な知識を現実的なものとみなさなかったと述べており，アリストテレスとメンガーの差異を示した。後者の解釈については，新カント派の「理念型」が，歴史的・個別的な因果関係を解釈する際の補助手段として考えられているのに対して，メンガーの厳密型では，理論科学の主題である一般的本質と精密法則に不可欠な要素を提供していると論じており，新カント派とメンガーの差異を明確に打ち出した。

[5] プシュケー(Psychè)とは，身体や精神の源泉を指すものであり，一般的には，生き物とそうでないものを分ける「魂」あるいは「心」と考えられている。日本でいうところの「気」という概念に近いと考えられる。古代ギリシャでは，まずソクラテスによって知や徳との関連づけが行われ，「善く生きること」がプシュケーの概念から考慮された。そして，プラトンは，プシュケーを，いずれ死する人間の身体を超越

したものであり，滅亡することのない「知」と考えた。くわえて，人間の判断そのものが，身体的器官を通じた経験的なものと，プシュケーによるものとで分けられると考えた。続いて，アリストテレスは『霊魂論』を著しており，プシュケーを，生命をもつ自然的物体の形相に関するデュミナス（能力）と考え，生体の本質あるいは生体を動かす源泉として理解した。本稿で論じているように，メンガーは，プラトンよりもアリストテレスによって展開されたプシュケーの概念を高く評価した。

[6] メンガーのアーカイブズは，アメリカのデューク大学（Menger Papers）ならびに一橋大学（メンガー文庫）に保管されている。メンガー文庫が一橋大学に置かれた経緯については Campagnolo (2000) に詳しい。八木紀一郎はメンガー文庫にて，メンガー自身が改訂を意図していた『国民経済学原理』の改訂稿を綿密に調査し，メンガーの意図を反映して『一般理論経済学　遺稿による「経済学原理」第２版』（邦訳）を公刊している。メンガーが『原理』の第二版を構想していた点に関する議論は，八木紀一郎（1984）「解説　メンガーの探求と『経済学原理』の改訂作業」『一般理論経済学』所収，みすず書房，533-549 頁を参照されたい。

[7] メンガーがゴッセンの著作を剽窃したとパンタレオーニが提起した点は，現在では間違いであったと考えられている。しかしながら，ハイエクは「彼［メンガー］がドイツ人先行者 H.H. ゴッセンを知らず，ジェヴォンズならびワルラスが彼らの最初の著作を出版した際に［ゴッセンを］知っていたというのは驚くべきことである」（Friedrich A. von Hayek. 1981. 'Introduction,' In *Menger's Principles of Economics*, translated by J.Dingwall and B.F.Hoselitz, New York Library Press, p.12）とさえ述べている。メンガーの剽窃に関するパンタレオーニの告発は，彼が 1889 年に G. Barbera 社から出版した *Principii di Economia Pura* の初版（p. 121）において行われた。

[8] 実際にメンガーは，貨幣の内的価値に関する考察はレキシスの研究に詳しいと言及している（カール・メンガー『一般理論経済学』，八木紀一郎，中村友太郎，中島芳郎訳，みすず書房，1892 年，Ⅱ巻，465 頁）。ケインズは，レキシスについて次のように追悼の文章を寄せている。「レキシス教授の逝去を報じなければならないのは，哀惜の念に堪えない次第である。…経済学におけるレキシスの業績は，主として，有名な『国家学辞典』（*Handwörterbuch der Staatswissenschaften*）と係わりがあり，…おそらく最も独創的な貢献は，人口と性別比率の問題に関する統計学的研究，およびこれらの研究を通じて彼が展開するに至った，統計学の純粋理論の中に見出すことができる。…レキシスの方法は，1885 年にエッジワース教授によって『統計学雑誌』50 周年記念号におけるその論文「統計学の方法」において，イギリスの読者に紹介し，示された。…レキシスは科学上の高い名声と，公平さ（たとえば，複本位制の問題に対する彼の態度にその事例が見られるように）を重んじた性格とを兼ね備えており，老練な経済学者の一団の尊敬すべき一員であった」（Keynes, J.M. ［1933］ 1972. Essays in Biography, In *The Collected Writings of John Maynard Keynes,* Volume X, The Macmillan Press LTD, pp.317-318. 大野忠男訳『人物評伝』，『ケインズ全集 第 10 巻』，東洋経済新報社，1980 年，423-425 頁）。

[9] バスティアは，穀物法論争に関心を抱いた自由貿易主義者であり，機会費用の概念を明示したことで知られている。ここでは，バスティアが労働や快楽しか考慮しておらず，メンガーが経済学において本質的に重要であると考えるような，私的利益と社会的利益の区別を怠っており，各主体の幸福に対する価値判断については考慮しなかったために，ゴッセンとともに批判されたと考えられる。

[10] エミール・カウダーは，前述の *A History of Marginal Utility Theory* の 82 頁において，このメンガーによる書き込みの原文ならびに英訳を掲載している。ところが，カウダーの英訳と本稿の原著者の英訳とは若干異なっている。原文：Gossen fehlt: Für ihn hat Arbeit ［technische］ eine ganz exceptionelle Stellung. Alle Mängel der mathem ［atischen］ Methode in Psychol ［ogischen］ Dingen. Nur Genuss-nicht Wichtigkeit für Leben und

Wohlfahrt [Höchster Genuss des ganzen Lebens] Arbeit und Genuss ähnlich wie bei Bastiat (?) [the last two words cannot be deciphered]. カウダーによる英訳：It is Gossen's error that technical labor has a completely exceptional position. He reveals all the errors of the mathematical method in psychological matters. He is only interested in enjoyment and not in the importance for life and welfare. (High enjoyment for the whole life.) Labor and enjoyment have a similar role as in Bastiat's work（技術的労働が完全に例外的な場所にあるというのは，ゴッセンの誤解である。彼は，心理学の問題に含まれるあらゆる数学的手法の誤りを明らかにしている。彼は，喜び(enjoyment)に関心を寄せているだけであって，人生や福祉に対する重要性には関心をもっていない。〔全生涯の喜び[に関心があるだけである]。〕労働や喜びは，バスティアの研究におけるのと同様の役割をもつものである)。以上より，原著者とカウダーとの相違は，原著者がメンガーの記述に忠実であるのに対して，カウダーは読みやすさを優先し，いくつかの言葉を補足した点にある。カンパニョーロ博士によれば例えば，メンガーによる 'Alle Mängel der mathem [atischen] Methode in Psychol [ogischen] Dingen' という指摘に関して，カウダーは 'He reveals' という語を補足しているが，メンガー自身は「暴露」を意図する言葉を記していないという。

[11] メンガーの効用に関する表現は特殊である。彼は，第一にモノから効用物への変化を捉えた。そもそも人間に欲望が存在するため，モノに人間の欲望を満足させる性質が内在すると考える。それゆえ，人間がモノの性質と欲望満足の関連に関する認識を有することを通じて，欲望満足のために，人間がモノを支配するというのである。結果としてモノは効用物へ変化する。第二に，効用物から財への変化を捉える。そもそも人間はモノを効用物として認識することができ，さらに効用物が支配可能な状態にあるとする。この状態において，財性質が確立する。それは，第一次財パン，第二次財小麦粉，第三次財小麦といったように，欲望満足にもとづく配列(他の補完財に対する支配)を描き出すことができる。したがって，高次財は，低次財の財性質に制約されるとした。そして第三に，財から経済財への変化を捉え，将来におよぶ生命と福祉の維持のために欲望を満足させる場合を考える。そこでは，将来に対する先行的配慮が及ぶ期間内における諸財の需求数量が決定される。支配できる諸財の数量(支配可能量)の決定は，非経済財と経済財とに区分され，非経済財では，支配可能量が需求を上回り，経済的配慮は不要とされる。経済財においては，支配可能量が需求を下回る。それゆえ，欲望の一部が満たされず，合理的であるならば，さらに欲望満足のために努力がなされるというものである。メンガーの限界効用に関しては，八木紀一郎(1990)「メンガー『経済学原理』の成立」『経済論叢』(京都大学)，146 巻 1 号，91-123 頁。ならびに，八木紀一郎(2006)「C. メンガー―精密的理論と主観主義」『経済思想のドイツ的伝統』，日本経済評論社，113-165 頁に詳しい。

[12] ドイツ社会政策学会は，1872 年に設立され，歴史学派の人びとがその中心であった。後にオーストリア学派の人びとも加わり，商工業者に関する実態調査を行うことで労働問題を明確化し，議論の俎上に乗せた。よく知られているように，この学会は 1932 年にナチス政権の圧力によって解散した。日本の社会政策学会は，このドイツの社会政策学会を参考にして結成され，主としてドイツ新歴史学派の思想的影響が大きかったと言われている。

[13] クニースは，フライブルグ大学教授を経て，1865 年よりハイデルベルク大学教授を務めたドイツ旧歴史学派を構成する代表的人物である。彼は，ヒルデブラントの国民経済学の議論の影響を受けており，国民生活の倫理的・政治的な目的から経済法則の解明を試み，「道徳的・政治的学科」としての政治経済学を構想した。

[14] シュンペーターは 20 世紀初頭のウィーン大学で，ミーゼスやヒルファーディングらが集っていたベーム＝バヴェルクのゼミナールに参加していた。オーストリア学派の醸し出す知的風土のなかで学んだシュンペーターは，『理論経済学の本質と主要内容』において，経済学，社会学，心理学における各々

の学問の独立性について言及している。例えば,「経済学と心理学との間には,認識論的にも実質的にも,われわれの成果に到達するために心理学の助けを借りねばならないような類の関連はまったく存在しない」(J.A.Schumpeter. 1908. *Das Wesen und der Hauptinhalt der Theoretischen Nationalökonomie*, Lipzig: Verlag von Dunker & Humbolt. p.544. 大野忠男，木村健康，安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』，下巻，375 頁，傍点ママ)と述べている。ヴェーバーと同様に，シュンペーターをオーストリア学派の一員として規定するには多くの議論を要するが，少なくとも初期の彼の経済学方法論は，メンガー以来のオーストリア学派の方法論から影響を受けていたということができるだろう。

解説：経済学と心理学の連関をめぐる学説史的検討

1．経済学史における経済学と心理学の連関

「アダム・スミス問題」は，経済学と心理学の連関を意識づけた最も象徴的な経済学史上の出来事である。それは，『道徳感情論』における共感原理と『国富論』における利己心に基礎づけられる経済原理とが矛盾するのではないか，さらにそのことは，スミス(Adam Smith, 1723-1790)が思想的立場を転向したのではないだろうか，という点をめぐる問題であった。現在では，『道徳感情論』(初版：1759 年から第 6 版：1790 年にかけて)の改訂過程と『国富論』(初版：1776 年)の間に，スミスの思想的転向はなく，『道徳感情論』における共感概念と『国富論』における利己的行為とが併存するものであるとの合意を得ている。「アダム・スミス問題」は，このようなスミスの思想的一貫性をめぐる議論として展開されたが，その発端は，ドイツ語圏における二大勢力－オーストリア学派とドイツ歴史学派－の方法論をめぐる議論に求められる。

1871 年のウィーンにおいて，カール・メンガー(Carl Menger, 1840-1921)は『国民経済学原理』を著すことによって限界分析を理論の礎石とするオーストリア学派を創始した。だが，当時の支配的勢力は，シュモラー(Gustav von Schmoller, 1838-1917)が率いるドイツ歴史学派であった。前者が自然法則としての精密理論を追究したのに対して，後者は，実証にもとづくかたちで経験法則の理論化を目指した。両者は，メンガーが歴史学派における経験的な調査・研究と理論研究との混同を批判したことをきっかけにして，経済学方法論に関する論争を生じさせた。この論争は，シュモラーがメンガーからの反批判の文書に応答することなく返送するというかたちで終了している。この論争が「アダム・スミス問題」といかにして連関するのであろうか。

方法論争がもたらした学問的意義は，経済学における純粋理論研究と歴史的事実との関係性を追究することの意義に注意を向けたことにある。社会政策学会の中心人物であったシュモラーは，「利己心」にもとづくメンガーの展開する国民経済学を一般化することはできないと考えていた。両者の立場は，拡大解釈を恐れずに言うならば，メンガーが，スミスの『国富論』体系を利己心にもとづく経済原理の働く抽象的世界として理解する一方で，シュモラーが，スミスの『道徳感情論』における道徳哲学的な側面を包摂するかたちで現実の行為主体の認識を追究し，スミス体系を総合的に解釈していたと指摘することができるように思われる。このようなメンガー経済学に対する解釈は，後の経済学が進んだ道にも大きな影響を及ぼすことになった。

20 世紀に入ると「アダム・スミス問題」はほとんど顧みられることなく，限界主義的経済学が支配的な分析方法として確立されていく。換言すれば，行為主体としての人間の意思や感情への注目が後退し，利己的な行為主体を想定する理論枠組みを中心にして議論を展開した。このような動向は，アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)の経済学体系に対する解釈にも確認されうる。マーシャルはミク

ロ経済学の原型をなした人物の一人として知られている。だが，その一方で，彼が若いころに心理学研究を通じて人間の能力を発達させることを研究課題として掲げており，人間の質的向上を分析枠組みの基礎に位置づける経済成長理論―いわゆる，有機的成長論―を展開しようとしていたことは，近年に至るまで，まったくと言っていいほど注目されてこなかった。マーシャルが主著『経済学原理』の序文において，一貫して部分均衡論を，複雑な経済現象を分析する際の初歩的段階として位置づけると強調していたにもかかわらず，である。このことは，限界主義的経済学が，現実の経済現象をよりよく説明すると理解した学生や研究者が多かったことを示している。そのような理解を促進したひとつの契機は，やはりマーシャルが1903年にケンブリッジ大学の道徳科学トライポス(優等卒業試験)から経済学の卒業試験を独立させたことに求められるだろう。「産業の将帥(the captains of industry)」としてイギリス経済を領導していくことが期待されていたケンブリッジの学生たちは，マーシャルの『経済学原理』を教科書にして，マーシャルが歴史学派の解釈を指していうところの原論編――需給均衡理論など――を正統的な経済学として学んだ。ところが，1907年の『経済学原理』第5版において，マーシャルがもっとも力を傾注した「第6編 国民分配」―彼の有機的な経済成長理論の基礎理論―については，学習の対象とならなかった。それどころか，弟子のマグレガー（David H. MacGregor, 1877-1953)に見られるように，批判的検討の対象とさえなった。「アダム・スミス問題」やマーシャルが常に意識していた問題関心のように，経済現象の分析と人間の倫理や道徳に対する考察とは不可分な関係にあり，このことは，現在では多くの学説史研究が明らかにしている。それゆえ，20世紀に至るまでの経済学は，方法論的段階において経済学と心理学を独立して扱うべきか否かに関する確固とした合意を得ていたわけではないといえよう。

経済学の黎明期にあったアダム・スミスは，道徳哲学に基礎づけるかたちで経済学を展開したことは，すでに述べたとおりである。その一方で，現代経済学の揺籃期にあったメンガーは，人間の道徳感情を扱う学問を経済学の基礎として位置づけることを認めることなく，限界分析を確立することによってオーストリア学派を創始者となった。ところが，メンガーは「人間行為(human action)の唯一の原動力としての苦痛と快楽を拒否」(Kauder 1965, p.96)している点において，他の限界革命の担い手たち――イギリスのジェヴォンズ(William Stanley Jevons, 1835-1882)やフランスのワルラス(Marie Esprit Léon Walras, 1834-1910) ――とは明らかに立場を異にしている。数学の使用に対しても，メンガーと他の二人とは明らかに異なっていた。メンガーが国民経済学を展開し，限界効用理論の確立に大きな貢献をなしたことは事実としても，実際にメンガーは，快楽と苦痛を行為の動機にする合理的な経済人を想定していたのだろうか。シュモラーと繰り広げた方法論争におけるメンガーの立場が過度に強調されることによって，メンガーの豊かな議論に対して紋切型の解釈が与えられたのではないだろうか。

2．カンパニョーロ論文の要点

カンパニョーロ博士は，厳密な資料調査にもとづいて，メンガーの経済学方法論が確立される過程を詳細に描写し，メンガーが，快楽と苦痛の二元論的に人間の動機を判断する功利主義ではなく，アリストテレスによるプシュケー(psyche)の概念を基礎にして人々の幸福状態(well-being)を模索していたことを明らかにした。メンガーは，心理学に基礎づけられた経済学の展開を否定し，学問の適正な領域と範囲を強く意識していた。その学問的立場は，例えば，ヴェーバー（Max Weber, 1864-1920)が経済学と心理学の「厳密な分離(*strenge Trennung*)」を提唱したこと，さらにハイエク(Friedrich

August von Hayek, 1899-1992)が，心理学の著作と経済学の著作を完全に異なる内容によって著したことによって，オーストリア学派を規定するひとつの特徴でさえあった。このようなオーストリア的特徴は，人間の幸福状態に対するメンガーの哲学的理解を探究することによって，より明確なものとなる。

本稿の第2節第3項では，メンガーにおける幸福概念と，彼によるアリストテレスのプシュケーに対する理解が扱われている。当時のオーストリアの学者や知識人たちにとって，アリストテレス倫理学は，教養として学ぶべきものであり，メンガーにおいてももちろんそうであった。カンパニョーロ博士によれば，メンガーは，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』，『霊魂論』，『政治学』に直接的な言及を行ったという。よく知られているように，アリストテレスは，人間を「社会的存在(ポリティーコン)」として把握しており，そのような人間の徳や魂の働きについて議論を展開した。メンガーは，アリストテレスのいう「プシュケー」の概念を，「人間全体における食べ物に対する欲望」ならびに「物的必要」を「全体的な満足を探求する人間の意図」として理解しており，より具体的には，感情と理性に働きかける魂であると考えた。このようにして，アリストテレスのプシュケーの概念は，メンガーに「自然的満足のものさし」に関する着想をもたらした。「自然的満足のものさし」という一般法則は，「生存――生活――より善く生きる」という三つの要素によって構成される。メンガーの体系において，人間は，財に対する必要を常に「自然的満足のものさし」で測りながら充足するよう行為する。経済主体もまたそのように意思決定を行うことになる。「より善く生きる」あるいは「善き生活」こそ――集計的な快楽の帰結としてもたらされる「最大多数の最大幸福」の状態とは明らかに異なる――，メンガーが経済分析を通して志向した幸福状態(well-being)であった。それゆえ，メンガーの想定する人間(あるいは経済主体)は，あらゆる財に対して一律の共通した完全な評価を下すことができない。そこで，プシュケーの概念を人間主体の本質に連関させることによって，メンガーは，人間の「主観的判断」を分析枠組みに取り入れたのである。このことは，ジェヴォンズやワルラスによる限界主義的な人間理解よりも，かなりの程度，柔軟な理解であったといえるだろう。カンパニョーロ博士はこのような分析手続きを経て，「プシュケーのギリシャ的観念が，当時の功利主義的あるいは快楽主義的な見解よりも広く包括的な概念であることをメンガーに理解させた」と断言する。

それでは，メンガーがプシュケーの概念を重視したことと，ある科学が別の科学に従属することに対して彼が否定的であったこととの関係は，どのように理解すればよいのだろうか。「メンガーがアリストテレスに啓発されたことは疑いようのないことである」。だが，メンガーのそのような態度にもとづく経済学は，当時の実験心理学の知見にもとづく精神分析の議論を用いた経済学の展開とは明らかに異なる。カンパニョーロ博士は，「科学的原理の本質が働きかけるという理由から，ある科学を別の科学の適用可能な領域として容易に扱うといった考えに，メンガーは一切同意しなかった！」と述べる。すなわち，ある科学(経済学)が別の科学(心理学)の概念や理論のすべてを独善的に取り込んでしまうことをメンガーは拒否したのである。その端的な例が，ドイツ歴史学派経済学と歴史学の関係に見出された。各々の学問固有の研究領域をわきまえて議論を展開することは，メンガー以降のオーストリア学派の人々に共通する特徴であった。カンパニョーロ博士は，本稿の第3節において，マックス・ヴェーバーやF.A. ハイエクといった代表的なオーストリア学派経済学者の方法論のなかに，メンガーの方法論の積極的な影響を見出していく。

メンガーの財の分類は，プシュケーの概念にもとづいて，自らの生活や幸福状態にとって意義があるのかどうかを主観的に判断することに

よって決定される。例えば，「生存」に関わる消費財は低次財として位置付けられ，そのような財の生産に用いられる財は高次財として位置付けられる。そして，メンガーにおいて価値とは，財を獲得することの意義のことである。一回目の食事から得られる欲望満足が10の価値を有するとするならば，2回目の食事がもつ価値は低下するだろう。喫煙の意義は，生存にかかわることがないので，食欲を満たすことの意義よりも低い。そのため，1回目の喫煙における欲望満足は，例えば6の価値であり，二回目の喫煙の価値は5というように低下する(付録を参照されたい)。ヴェーバーは，このようなメンガーの欲望満足に対する限界分析と，心理学的な実験的手続きから限界効用を理解することとを明確に区別した。とりわけ，後者の分析は，物的必要(心の諸形態)と人々の欲望満足(行動の動機)を一致させるかたちで限界効用を導出する。ヴェーバーによれば，このような精神の諸形態(心理学の問題)と行動の動機(経済学の問題)が一致することはなく，経済学者にとって精神の問題は考察の対象外であった。それゆえ，両者の間では「厳密な分離(strenge Trennung)」がなされるべきであると主張したのである。「科学は，その適切な基礎をそれぞれもつことで，われわれに現実の諸側面を理解させる」。ヴェーバーにとって，そしてもちろんメンガーにとって，経済行為の基礎的理解を，他の科学から導出される理論を用いて展開することは強く否定しなければならない。このような学問間の分離をさらに推し進めたのが，ハイエクである。青年ハイエクが，心理学者になるべきか，経済学者になるべきか，を悩んでいたことはよく知られている。そのようなハイエクは，1952年に『感覚秩序』という心理学的著作を著した。ところが，その著作には，経済学的文脈がまったく見受けられない。他方，彼の経済学では，必要充足に関する主観的感情が経済主体の中心をなすと考えるが，彼の経済学の諸著作において『感覚秩序』の議論を見出すことはできない。ハイエクによる「カタラクシー」として知られている概念は，このような心理学と経済学の並行関係が維持されていればこそ，一般性を有するものとして確立することができたとカンパニョーロ博士は強調する。メンガーは，心理学の知見を評価していたが，経済学の分析領域が心理学の領域に入り込むことに警鐘を鳴らしたにすぎない。ヴェーバーやハイエクといった後継者たちがオーストリア学派の学問的姿勢をより厳密なものにしたといえる。ヴェーバーはその方法論的段階において経済学と心理学の「厳密な分離」を提唱し，ハイエクにおいては，実践的に心理学の著作と経済学の著作を分けたのである。

結論として，メンガーが経済学の学問的帝国主義を批判していたことが指摘されている。メンガーによるゴッセン批判の注釈が示していたように，メンガーは，快楽主義的な態度や心理学の領域への数学的手法の導入を拒絶した。各学問分野には，各々が議論すべき領域が規定されており，そこから逸脱し，他の学問分野を侵食することは批判されねばならない。メンガーの『国民経済学原理』で展開される財の分類をみれば，経済財から人間の徳に関する議論が明確に分離されている。メンガーは，消費財を低次財として位置付け，生産財(高次財)の価値が低次財の予想価値に依存すると考えた。「限界効用」の確立は，数学的な手法を人々の欲望満足に適用することによって価値の量的測定を可能にした点に，その学問的貢献がある。そのような限界革命の担い手の一人に含まれるメンガーの経済学も，当然そのように理解されかねない。カンパニョーロ論文の本質は，そのような定型的にメンガーの主観的価値論を理解する人々の目を，メンガーの哲学的素養に向けさせることによって，彼の経済思想に対するより豊かな解釈を引き出す点に最も力が傾注されている。かくして，カンパニョーロ論文は，経済学は心理学的基礎づけを必要とするべきか，心理学と厳密に区別すべきか，という方法論上の議論に留

まるものではなく，いかなる態度でもって各々の学問固有の特性を活かしながら，各学問の役割を果たしていくべきかを読者に語りかけているのである。

参考文献　＊邦訳があるものについては原著者が参照した文献に併記した。

Aristoteles. 1956. *De Anima*, edited by Sir D. Ross, Oxford / Oxford University Press. 山本光雄訳『霊魂論』『アリストテレス全集 6』所収，岩波書店，1968 年。

Aristoteles. 1981. *Politik*, Übers. und mit erkl. Anm. versehen von Eugen Rolfes, Mit einer Einleitung von Günther Bien, Hamburg. / Felix Meiner Verlag. 牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会，2001 年。

Aristoteles. 1985. *Nikomachishe Ethik*, In *Aristoteles Werke, Schriften zur praktischen Philosophie*, translated by Riedler, Stuttgart / Offander, 1856. 林一功訳『ニコマコス倫理学』京都大学学術出版会，2002 年。

Campagnolo, G. 2000. La bibliothèque viennoise de Carl Menger conservée au Japon: étude des sources d'une pensée économique, in *Austriaca*, No.50. 山崎耕一訳「メンガー文庫：ある経済思想の原資料」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』，22 号，2002 年，23-39 頁。

Campagnolo, G. 2002. Une source philosophique de la pensée économique de Carl Menger: l'Éthique à Nicomaque d'Aristote, *Revue de philosophie économique*, No.6/2, pp.5-35.

Campagnolo, G. 2009. Origins of Menger's Thought in French Liberal Economists, *Review of Austrian Economics*, No. 22, pp.53-79.

Campagnolo, G. 2010. *Criticism of Classical Political Economy. Menger Austrian economics and the German Historical School*, New York / Routledge.

Chalmers, D. 1996. *The Conscious Mind*, Oxford / Oxford University Press.

Dennet, D. 1991. *Consciousness Explained*, London / Penguin.

Frey, B. and Benz, M. 2004. From imperialism to inspiration: a survey of economics and psychology, in *The Elgar Companion to Economics and Psychology*, edited by John B. Davis, Alain Marciano and Jochen Runde, Cheltenham/E.Elgar, pp.61-83.

Gossen, H.H. 1854. *Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln, Berlin. The Laws of Human Relations and the Rules of Human Action Derived Therefrom*, translated by R C. Blitz, MIT Press, 1983. 池田幸弘訳『人間交易論』，日本経済評論社，2002 年。

Hayek, F. [1952] 1976. *The Sensory Order. An Inquiry into the Foundations of Theoretical Psychology*, reed. Chicago / The University of Chicago. 穐山貞登訳『感覚秩序』，『ハイエク全集Ⅰ－4』所収，西山千明，矢島鈞次監修，春秋社，2008 年。

Hume, D. [1740] 1964. *A Treatise of Human Nature and Dialogues Concerning Natural Religion*. In *David Hume The Philosophical Works*. Vol. 1, 2. Aalen: Scientia Verlag Aalen. 大槻春彦訳『人性論』岩波書店，1948 年。

Kaulla, R. 1906. *Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien*, Tübingen.

Kautz, J. 1860. *Die Nationalökonomie als Wissenschaft*, reed 1858, Wien.

Kraus, O. 1905. Die aristotelische Wertthorie in ihren Beziehungen zu den Lehren der moderner Psychologenschule, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*. Tübingen/Verlag der Laupp'schen Buchhandlung.

Lexis, W. [1895] 1911. *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 3rd edition, Jena: Fischer.

Menger, C. 1871. *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*. Wien/Wilhelm Braumüller. 安井琢磨，八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社，1999 年。

Menger, C. 1883. *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie insbesondere*. Leipzig/Duncker &

Humbolt. 福井孝治，吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』，岩波書店，1939 年。

Menger, C. 1889. Grundzüge einer Klassifikation der Wirtschaftswissenschaften, pp.187-218.

Mises, L. 1966. *Human Action. A Treatise on Economics*, 3rd edition, Chicago/H. Regnery Co. 村田稔雄訳『ヒューマン・アクション―人間行為の経済学』，増補新版，春秋社，2008 年。

Smith, A. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. In The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith II*. Vol. 1, 2. Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』中公文庫，1978 年。

Smith, A. [1790] 1976. *The Theory of Moral Sentiments. In The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith I*. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道徳感情論』岩波文庫，2003 年。

Smith, B. 1990. Aristole, Menger and Mises: an Essay in the Metaphysics of Economics, *History of Political Economy, In Carl Menger and his Legacy in Economics*, annual supplement vol. 22, edited by Bruce J. Caldwell, pp. 263-288.

Smith, B. 1997. The Connectionist Mind: A Study of Hayekian Psychology, in *Hayek, Economist and Social Philosopher: A Critical Retrospect*, edited by S.F. Frowen, London/Macmillan, pp.9-29.

Smith V. 1982. Microeconomic System as an Experimental Science, *American Economic Review*, Vol.72, No.5, pp.923-955.

Stricker, S. 1879. *Studien* über *das Bewusstsein*, Wien /Wilhelm Braumüller.

Tuerck, D. 1995. Economics as Mechanism: The Mind as Machine in Hayek's *Sensory Order* In *Constitutional Political Economy*, Vol.6, pp.281-292.

Walras, L. 1885. Un économiste inconnu: H.H. Gossen, *Journal des économistes*, vol. V/4, pp.68-89

Weber, M. [1908] 1988. Die Grenznutzlehre und das 'psychophysische Grundgesetz,' In *Archiv für Staatswissenschaft und Sozialpolitik, reprinted in Gesammelte Aufätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen / J.C.B. Mohr (Paul Siebeck).

Widemann, P. 1876. *Eine Untersuchung des Ursprungs den Formen und Gesetze des Denkens*, Chemnitz / Schmeitzner.

付録

以下は，メンガーによる限界主義的推論を描写した価値論の表である。この表はまた，10 種類に関する欲望の満足に関する意義を表にしたものである。メンガーによれば，その意義とは，「価値とは，具体的な財または具体的な財数量が，われわれにたいして獲得する意義，自分の欲望を満足させることがこれらの支配に依存していることをわれわれに意識させることによって，それらがわれわれにたいして獲得する意義である」(Menger 1871, p.78／訳 68 頁)とした。Ⅰにおける欲望を食欲とするならば，1 回目の食事による欲望満足の意義は 10 であり，2 回目のそれは 9，三回目のそれは 8，・・・というように次第に意義が低下していく。メンガーが例示し，本稿でも取り上げたタバコを例にあげると，タバコがⅤにおける欲とするならば，1 回目の喫煙は 6，2 回目の喫煙は 5，・・・というようにして，最終的には 7 回目に喫煙することから得られる欲望満足の意義が消失する。

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
8	7	6	5	4	3	2	1	0	
7	6	5	4	3	2	1	0		
6	5	4	3	2	1	0			
5	4	3	2	1	0				
4	3	2	1	0					
3	2	1	0						
2	1	0							
1	0								
0									

出所: Menger (1871) , p.93